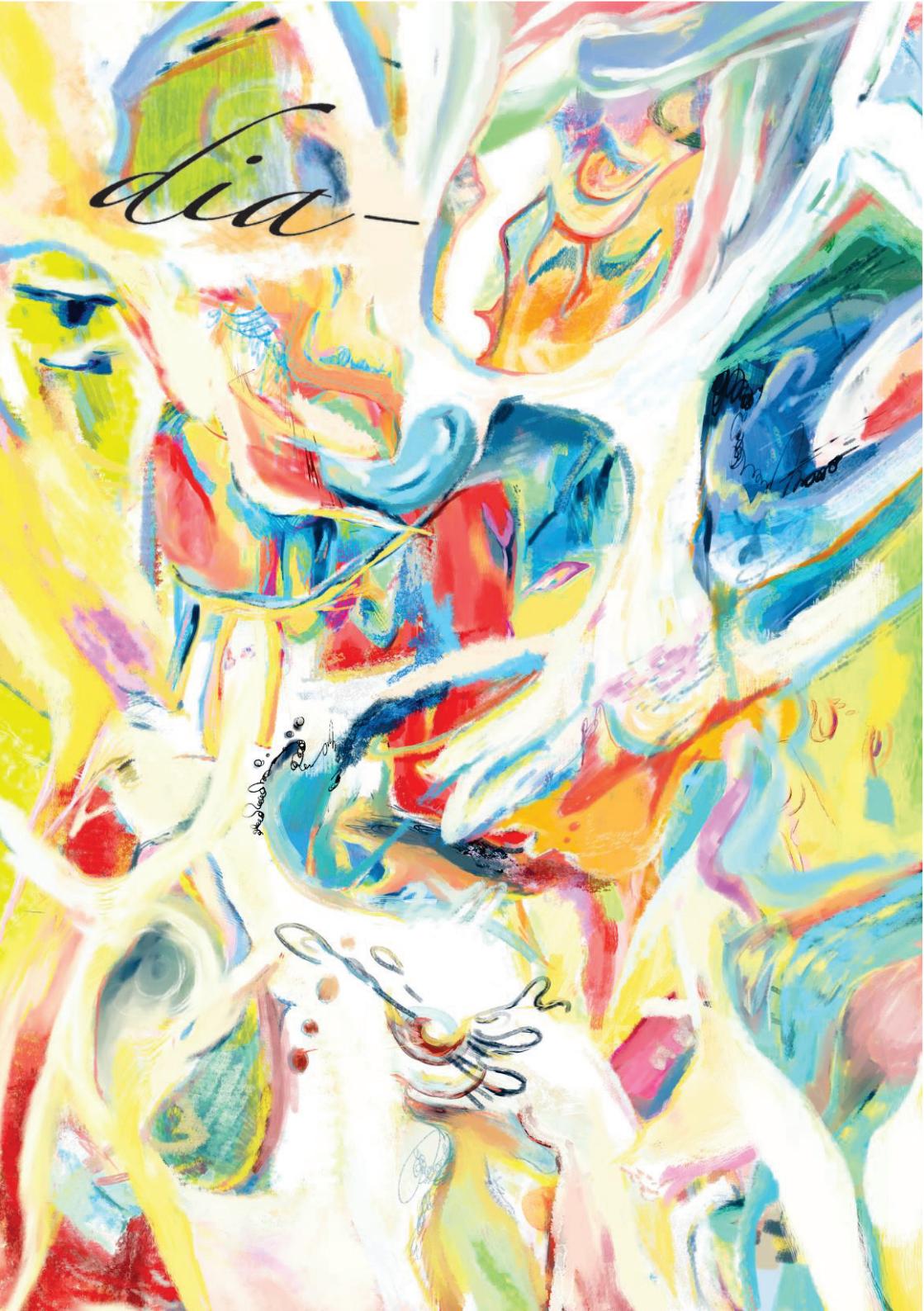


dia-



dia-

onecafe第350回記念冊子



onecafe

はじめに

2014年に哲学カフェサークルとして発足したonecafeは、2022年の10月に第350回を迎えました。第350回の記念誌である本書の発刊は、多くの方のご協力がなければ成し得ませんでした。改めてご支援いただいた皆さま、ご寄稿いただいた皆さま、また表紙を担当してくださった中津川莉音さんに心より感謝を申し上げます。

本書のタイトル『dia-』は、dialougeの語源であるdia-logosから来ています。「～を通して」を意味する接頭辞”dia-”の意の通り、本書を通してonecafeという縁に包摂された個の多様さ、その広がりの豊かさを1ページごとに読み取って頂けたら幸いです。

Dear you. 親愛なる他者の皆さまへ、本書を贈ります。

2023年3月1日

onecafe 運営

目次

学生による哲学対話の実践 onecafe 運営.....	7
哲学対話に哲学の知識は必要なのか？ 高原亮.....	13
久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする 日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない ー『左様なら今晚は』試論一 高澤和祥	19
自己喪失のための表現入門 vol.45 yuridoll	29
虚ろな暇、充ちる生 Yu	35
哲学から考える「人生」 高橋涼香	51
木漏れ日を拾う Yui Takano	55
対話を 大庭裕之	59
陶酔 育	67

長月の夕焼け・出発前 侑木燈 73

哲学対話と出会ってから komu 77

理解できないものがあるという幸せ R.N 83

ヴィジュアルアート哲学カフェ 大塚益美 87

onecafe350回・本質を見よう・今宵もお待ちしております 大塚益美 99

OBOG会『Fan Light』結成 唯 103

活動記録

第8回哲学プラクティス連絡会 111

開催テーマ一覧 115

学生による哲学対話の実践

onecafe 運営

onecafe は、2014 年に関東の学生有志によって立ち上げられた哲学カフェを開催している団体です。発足以降、8 年近くに渡って主に東京を中心に活動してきましたが、近年では関西や、コロナ禍以降はオンラインでも哲学カフェを開催しています。

「他者との対話を通して自分の価値観に気づく場を提供する」

onecafe はこの理念の実現を目指して哲学対話を開催しています。では、この理念が意味することとは一体何でしょうか？掲げられた理念の文言を解釈しながら、現運営が捉える哲学対話の場のあり方について考えてみます。

【他者との対話を通して】

それでは、「他者との対話を通して」というところから考えてみましょう。

まずそもそも、対話とは一体何でしょうか？対話を意味する言葉である"dialogue"は、ギリシア語の"dialogos"が由来になります。dialogos は"dia-"という"~を通して"を意味する接頭語と、"言葉"という意味を持つ"logos"という単語から構成されています。つまり、言葉を通してやりとりをするという意味です。また、やりとりをするためには相手の存在が欠かせません。このことから、対話とは、なにかの向き合う"相手"があってこそ発生する営みだと考えられます。

理念では、この相手を"他者"として置いています。特に onecafe は、"問い合わせ共に考える"他者の存在を重要視しています。

「他者」とは自分とは異なる存在です。部分的に重なっているように思えたり、「共感」という形で同意を示したくなる瞬間があるかも

しません。しかし、自分とまったく同じ価値観を持つ人を探すことが困難であることからも分かるように、他者とは基本的に自分とは違う考え方や価値観を持ち、違う経験をしてきた存在です。

つまり、他者と対話をすることは、違う主観を持った相手と向き合うということになります。

【自分の価値観に気づく】

「自分の価値観に気づく」とは、自分が何に対してどのような考えをもち、自分が今まで無意識に前提としていた考えはどのようなものであるのかを気づくことです。私たちは、他者との対話を通じて自分とは違う考えに触れたとき、今まで自明だと思っていたことが実は自明ではなかったことに気づくことがあります。さらに、なぜそのことを自明だと思っていたのかを解きほぐすことで、自分の価値観について自分でも気づいていなかった側面が明るみになります。

【場を提供する】

私たちは、ある設定された時間、決められたところに行けば、自身の属性を問わず、あるテーマについてフラットに、内省的に話し合うことができる、そういう場所が、自分たちが暮らす日常のどこかにあり続けることが重要であると考えています。対話を通じて知らなかつた自己を見つけていき、自分のあり方を模索していける。また、具体的な個々のテーマについて、共通点や接点を取り出し抽象化、収斂する過程を通じて、いかなる場合にも適用できるような、より普遍的なものを見出すことができる。そんな場が提供できたらいいな、と考えています。

何者でなくともいい哲学対話を、学生が開催する意義

私たちは学生が主体となって哲学カフェを運営しています。

哲学カフェがどのようなものかを考える際に度々言われることですが、哲学カフェは多くの人々に開かれているものであり、参加者の立場は区別なく、何者かであることは要求されない場合が多いです。哲学カフェの中には、参加者の素性、肩書どころか、名前すら聞かずに行っているものもあります。

そして、その立場の平等性や匿名性とは、会に集まる人々だけでなく、主催者も同様に求められるものであると考えています。むしろ主催者こそ、他の参加者の方々と対等な立場であるように努める必要があるとすら言えるかもしれません。しかし、私たち onecafe は学生による哲学カフェの開催を目的とし、運営メンバーも大学生、大学院生を募集すると明言しています。何者かであることが必要とされない哲学カフェを、私達が学生として開催する意義は何なのでしょう。

【参加ハードルの低い哲学対話の場の提供】

まず、「学生にとって、気軽に近い年代の人と話せる環境はより心理的安全性が高いこと」が挙げられると考えます。一般的に、哲学カフェを始めとする「哲学」と名のつく催しへの参加者のハードルは、決して低くはないと考えています。「哲学」という言葉から連想される堅苦しさや難しさ、さらに、「哲学的な催しに自分が参加して何か発言出来るのだろうか」という疑問や不安が参加への一步を遠のかせている側面は否定できません。また、いざ参加してみたときに自分に近い年齢の人が見当たらなかったとしたらどうでしょうか。人生の先輩たちを前に、10代や20代の若い人が哲学的な問い合わせについての自分の

考えを言うのは勇気が要ることだと思います。そこに、学生である私たちが哲学カフェを開催する意味があると思います。

若い人々にとって、年齢や属性の近い人が主催していること自体が、哲学対話に興味を持ったり参加の意思表示をしたりすることのハードルを下げるのではないかと思います。また、対話の参加者に親近感を覚えることで、「自分の意見を受け入れてもらえないのではないか」という不安を軽減し、より自分の意見を言いやすくなるだろうと考えます。

【機会提供】

他にも、若年層への「誰かと一緒に考え、気づく場」の提供が挙げられます。若い人々が何かについて誰かと一緒にじっくり時間をとって考える機会は、それほど多くないのではないかと考えています。あるテーマについて考えたい時に、一人だと中々考えが進まないこともあるでしょう。しかし、親しい誰かと一つのテーマについてじっくり話す機会もあまりないかもしれません。特に、それが哲学的な問いである場合、なおのこと難しいかもしれません。相手が哲学的に物事を考えたり、話したりすることを面倒がることもあり得ますし、場合によっては、変な人、危ない考えを持った人と誤解されるかもしれません。

さらに、ここ数年はコロナ禍の影響もあり、人と関わる機会そのものが失われている問題もあります。そこで、同年代の人々が関われる場を作り出すことで、哲学的な問いを考えることに興味のある同年代の若い人同士が、対話を通じて自分の考えを深める機会を提供できることには意味があると思います。

以上の 2 点の理由から学生が哲学カフェを実践することには一定の意義があるのではないかと考えています。

onecafe は歴代運営や参加者の皆様のご支援もあり、2022 年の 10 月に通算の開催回数が 350 回を超えることとなりました。これからも哲学対話の場として、さらなる発展を目指し続けていきます。

今後も onecafe の活動を見守っていただけると幸いです。

哲学対話に哲学の知識は必要なのか？

高原亮

初めに簡単な自己紹介から始めよう。私は約4年前に上京し、東京のある大学で倫理学(道徳哲学)を専攻している学生だ。onecafeの哲学対話には上京した頃から参加しており、その頃から運営にも参加している。2021年度には不肖ながらonecafeの代表も担当させていただいた。

私は「哲学対話で必要なルール」について(も)研究している。例えば、「他の人の発言を遮ってはいけない」・「差別的な発言をしてはいけない」といったルールは、哲学対話で広く採用されているが、このようなルールについて考えることが私の一つの関心である。

本稿では、これらのルールの中から「**哲学対話では哲学の知識(専門用語)を用いてはならない**」というルールについて考えてみようと思う。

一般的に、哲学対話に参加する際には、哲学の専門用語を知っている必要はないと考えられている。私たちonecafeの運営も「**全員が対話に参加できるようにするために、専門用語を使ってはいけない(どうしても使わなければならぬ場合には中学生にも理解できる程度の言葉で説明せよ)**」というルールを提示している。このルールは哲学対話の敷居を下げる、門戸を広げることに一役買っているだろう。

そのため、哲学対話界隈の多くの人は「哲学対話に哲学の知識は不要である」と考えているように思われる。実際、私自身もこのルールは採用されるべきだと考えている。しかし、伝統的な意見に無反省に従っている状態は、哲学という営みにおいてはよろしくないだろう。

そこで本稿では、哲学の知識(専門用語)の使用を制限するルールを擁護する主張をいくつか挙げた上で、それぞれに対して私から否定的な批判を与えようと思う。読者の皆様には、ぜひ私の批判に対する再反論を考えながら本稿を読んでみてもらいたい。

【①「歴史・伝統」からの擁護】

哲学対話の源流を辿ることによって、「哲学対話に哲学の知識は必要ない」という意見が成立した歴史的な過程が見えてくる。(諸説あるかもしれないが、)哲学対話は英語圏の教育現場で行われていた「子供のための哲学(P4C)」という教育プログラムの一部を日本に輸入したものであると言われている。そこでは、哲学の知識を伝授することではなく、子供たちが哲学的な問いについて自由な発想を用いて語り合い、思考を深めることを目標とされていた。これが日本における哲学対話の源である。

当然ながら、子供たちが積極的に対話に参加するためには、哲学の難しい知識は不必要であるどころか、時には邪魔にさえなるだろう。そのため、教育現場で哲学対話をする際には、哲学の知識を与えないまま哲学的なテーマについて考える方法が重視されるようになった。そして、このようなモデルがそのまま日本に輸入されたのである。このように「哲学対話の歴史・伝統」を顧みることで、「哲学対話に哲学の知識は必要ない」という主張に説得力を持たせることができる。

【①への批判】

しかし、「子供のための哲学」の中で作られたルールを「大人」である私たちも採用する必要があるのだろうか。私たちは(正しく努力すれば)哲学の知識を得られる程度の読解力や理解力を既に持っているかもしれないし、専門知識を使うことでより深い対話をすることができるかもしれない。もちろん、時間やモチベーションの関係で哲学の勉強はできないが、それでも哲学的なテーマについて話したいという人もいるだろう。だが、それは件のルールを消極的に採用する理由にしかならないのではないだろうか。

【②「自由な発想」からの擁護】

次に「**自由な発想のためには哲学の知識は邪魔だ**」というアイデアを考えてみよう。哲学対話では参加者が自由に考え、語ることが重要である。そのため、参加者に自由な発想をしてもらうことができるよう、哲学対話はデザインされなければならない。

哲学の知識は思考のヒントになることもあるが、同時に自由な発想を阻害してしまうこともある。様々な哲学の知識は、それぞれの哲学者が、それぞれの文脈において語った言葉をもとにしている。そのため、哲学の知識を用いて何かを語る際には、常にもととなつた哲学者の考え方やその文脈を前提してしまうことになるだろう。プラトンに関する専門用語を使いながら語るということは、プラトンの思想やそれが語られた文脈を前提にしながら語ることに他ならない。

一方で、強力な前提に縛られた思考は自由とは言えないだろうから、自由な発想のためには様々な前提から逃れることが肝要である。私たちが対話において専門用語を使うならば、その瞬間に私たちはいくつかの前提を背負うことになってしまい、そこから生まれる思考の自由度は幾分か下がってしまうことになるだろう。

【②への批判】

しかし、②で提示された問題点は「**哲学の知識**」ではなく、「**哲学の知識を使う人**」のものであるように思われる。たしかに哲学の知識には一定の前提が付きまとうだろうが、知識を使う人がそのことに留意していれば、偉人たちが残してくれた哲学の知識は新しい思考の出発点となりうるだろう。その場合、②から導かれる結論は「**自由な発想のために哲学対話では哲学の知識を使わないようにしよう**」ではなく、「**哲学の知識を適切に使うようにしよう**」というものになるだろう。

【③「対話の目的」からの擁護】

最後に「他人と対話するためには専門用語を使うべきではない」というアイデアを考えてみよう。ここでは、まず初めに哲学対話における「対話」について考えてみよう。

哲学対話の「対話」では、「討論」のように何らかの立場に立って話す必要はないし、相手の意見を崩しにかかる必要もない。また「議論」のように全体で何らかの統一結論を導くことも求められない。そうではなく、「対話」では他人との意思疎通を通じて他人と共に考え、思考を深めることが目指される。哲学対話の「対話」は、このような目標を持った活動を指すのである。

専門用語の使用はこのような対話の目的の達成を邪魔することがある。容易に想像できるだろうが、他の参加者が理解できない語彙で話をしても、他人と意思疎通することはできないし、ひいては対話をすることもできない。他人と対話するためには共通に理解できる語彙を使う必要があり、そのためには専門用語を排除した方が賢いと言えるだろう。「哲学対話では哲学の知識を使うべきではない」という意見を正当化する際には、「対話の目的」を根拠にすることができる。

【③への批判】

しかし、③からは「哲学の知識を使うべきではない」という結論ではなく、「哲学の知識を使うときは参加者が意思疎通できるように易しく説明しながら使うべきだ」という結論を導くこともできる。明確な定義を持っている専門用語は、参加者の共通理解を得られるならばむしろ意思疎通を容易にするだろうから、③と同じ「対話の目的」による主張を用いながら、「(易しい説明を加えながら)積極的に専門用語を用いるべきだ」と逆の主張をすることもできてしまうのである。

ここまで「哲学対話では哲学の知識(専門用語)を用いてはならない」というルールについて、それを擁護する主張を3つ紹介し、それぞれに對して否定的なコメントを与えてみた。

J・S・ミルが『自由論』で論じたように、ある考えが自明のものとなつた社会では、人々はその考えがなぜ生まれ、なぜ必要とされているのかを忘れてしまい、最終的にはその考えの効力が弱まってしまう。そうであるならば、「哲学対話では哲学の知識(専門用語)を使わないようしよう」というルールが自明のものとして広まっているonecafeにおいても、このルールについて再考することは重要であろう。

最後までお読みいただいた皆さんにも、このルールについて、ぜひ一度考えてみて欲しい。本稿がそのためのヒントとなれば光栄である。

※補足：哲学者の主張や専門用語を用いながら哲学対話をするとどうなるのかが気になる人には次の動画が参考になるだろう。

「哲学対話 PARA SHIF 「自由」：國分功一郎」

URL : <https://youtu.be/sEVbRsxWWHw>

久保史緒里は、自身が映画であることを
忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前に
ほかならない

—『左様なら今晚は』試論—

高澤和祥

久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない
—『左様なら今晚は』試論—

映画のあらすじ一緒言にかえて

2年同棲した恋人に振られ、尾道のアパートに一人残されたしがないサラリーマン、半沢陽介（萩原利久）のもとに、部屋にずっと棲みついていた美しい地縛霊（久保史緒里）が姿を現す。ずっと陽介とその恋人を見ていた彼女は対面早々、主人公の臆病さ、無責任さを批難する。最初は幽霊を邪険に扱っていた陽介だが、ベランダで独り涙を流す幽霊と会話を重ねるうちに打ち解けていく。生前の記憶はほとんどなく、自身の名前に関しても「「あ」と「い」が入った名前だったような…」と曖昧な彼女に対し、陽介は「愛助（アイスケ）」と名付け、愛助も陽介のことを「陽さん」と呼ぶことに決める。生前に恋愛をすることなく死んでしまった愛助は、陽介と触れ合い、デートをし、生前の記憶を思い出していく…。

I 二重の装置

『左様なら今晚は』は美しい映画だ。そして本作の久保史緒里は美しい。実はこの二つは同じことである。映画が映画であることの限界を超えようとする美しさを、久保史緒里は夕日のなかで純白のワンピースをたなびかせ、幽霊としての自分がもうそのかりそめの姿をこの世では保てないことを自覚しつつ、萩原利久と抱擁し、その晩にはさようならも言えずに、ただ眠る男に接吻をして消え去るほかない地縛霊として体現しているからだ。映画が映画であることの限界とは、フィルムはおろか、我々はスクリーンに指一本すら触れることを許されてはいないという、映画との接触の不可能性というあの残酷な現実の

久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない
—『左様なら今晚は』試論—

ことにはかならない。

傑作たる所以は、映画館とその外の現実世界、そして久保史緒里が囚われているアパートの一室とその外の世界（尾道）という、二つの二重の装置の類似性に起因している。そしてこの二つの二重の装置のさらに外側の世界全体、またさらにその外側のあの世まで含めた宇宙全体を覆いつくす忘却と想起の巨大な機械装置、つまり輪廻転生を繰り返す我々の非情な世界のなかで、久保史緒里はその小宇宙としての忘却と想起の装置たる映画館を通して、愛の透明さを忘却することなく、転生してもなお記憶を保持しつづけるからこそ、『左様なら今晚は』は美しい映画なのだ。

映画館という装置は、我々にプラトンの洞窟の比喩を思い出させる。前世はイデア界にいた魂たちがそれを忘却し、イデアの幻影を固定された席で見せられる洞窟というあの装置は、まさに映画館のことを予言でもしていたかのようだ¹。そしてこの状況は、前世の記憶を忘却した状態でアパートの一室から出ることのできない久保史緒里のおかれた状況をも思わせずにはおかない。また、映画終盤のデートの場面で、久保史緒里がシネマ尾道の前で「ここ、ずっと通ってたんよ」と言い、生前に映画が好きだったことをはっきりと記憶しているのは、アパートの一室と映画館、そして久保史緒里がおかれた地縛霊という身分が、想起の装置として機能しているからにほかならないのではないか。

¹ ジャン・ルイ・ボードリー「装置 現実感へのメタ心理学的アプローチ」1975年
『新映画理論集成② 知覚／表象／読解』フィルムアート社、1999年

久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない
—『左様なら今晚は』試論—

II 抱擁と接吻の逆転

この映画の真の偉大さは、抱擁よりも接吻のほうが甘美であるという我々の現実の価値観を久保史緒里が全身をもって逆転せしめているところにある²。

ベランダでタバコを吸う萩原利久をとらえたファースト・ショットの次に、引っ越しの準備に疲れた、別れゆく元恋人（永瀬莉子）が「一本頂戴」とタバコを萩原利久ねだり、火をつけようとするのだが、彼女は吸いながらでないとタバコに火がつかないことを知らない。「吸いながらじゃないと火つかないけど…」と萩原利久が言うと「ずっと陽ちゃんが吸ってるの見てたのに…」「2年一緒に暮らしてたけど、そんなもんなんだね」と元恋人はつぶやく。これは口吸い、接吻を否定しているかのようだ。おそらく、この後の物語全体を貫く接吻と抱擁の差異の予兆としてこのシーンは機能している。そしてそれにとどまらず、我々の現実の価値観をも反映しているのだ。「吸いながらじゃないと火がつかない」というセリフは、まさに恋の炎が燃え上がるのに接吻は不可欠だという通俗的な価値観を示している。

しかし、線香は口吸いなどなくとも火が付くのである。幽霊の久保史緒里が登場すると、タバコの紫煙から線香の芳香へという変移が、二人の関係の変化の最初の兆候となる。お祓いにちょっとは効くかも

² ここで、アイドルという職業そのものが接吻を禁じられた存在であることは思い出してよいかもしれない。接吻が遅延されつづけるこの映画は、まさにアイドルのために作られたかのようだ、と言うより、アイドルという職業概念そのものが、この映画のために存在したのだと我々は思うほかない。

久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない
—『左様なら今晚は』試論一

と思い、萩原利久が買ってきた線香だったが、「ええ匂い」「癒されま
すね」と久保史緒里は気に入ってしまう。重要なのは、これ以降萩原
利久が一度もタバコを吸うことなく映画が終わりを迎えるとい
うことだ。これは萩原利久演じる陽介に現れる最初の行動の変化であり、
それは無意識における愛助への思いやりと配慮を意味している。紫煙
から線香の煙への移行が、二人の親密な関係の端緒を視覚的に表して
いる。

人間の萩原利久と幽霊の久保史緒里は、互いに触れることができな
い。しかし、ある朝、久保史緒里は萩原利久ののどぼとけに触れるこ
とに成功する。初めて男性ののどぼとけを触り興奮する久保史緒里が、
実は恋愛経験をせずに死んでしまったことがわかるこのシーン以降、
二人の関係は親密さを帯び始める。久保史緒里はただの地縛霊から、
仕事から帰ってくる男を待つ女となる。

二人の親密さがより一層増すきっかけとなるのは、萩原利久の同僚
である須田（小野莉奈）がアパートを訪問するシーンだ。ソファで須
田に押し倒され、接吻をし、そのままことを運ぶという流れになるが、
その場に居合わせ、極度の性的緊張に心をかき乱された久保史緒里演
じる愛助は意図せずして須田に地縛霊としての姿を見せてしまい、須
田を怖がらせて追い出してしまう。須田が帰った後、眠ろうとする萩
原利久に詫びる久保史緒里だが、付き合ってもない女となぜキスで
きるのか、前の恋人に対しては一途に愛を注いでいたではないかと問
いいただしあはじめ、しまいには陽さん（萩原利久）みたいな人と付き合
いたいのかもしれない、と言い出す。生前に恋愛もキスも経験するこ
となく死んでしまった久保史緒里は、ここで萩原利久と口づけしよう
とするのだが、「ちょっとストップ」と、怖気づいた萩原利久が久保
史緒里の動きを封じようと手を彼女の肩に重ねたとたん、男の側から

久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない
—『左様なら今晚は』試論一

も久保史緒里に触れられるようになったことが判明する。

後日、久保史緒里を抱き寄せた萩原利久は「こんなふうに触れたら、
生きてる人と変わらないじゃん」「愛助、なんで死んでるの？」とい
う言葉とともに抱擁する。抱擁の発見ともいべき瞬間を収めたこの
シーンこそ、抱擁と接吻の逆転を雄弁に物語る本作の白眉だ。

抱擁しながら、人と触れ合うことの喜びを言葉にする久保史緒里に
対して萩原利久は「一回 100 円な」とつぶやき、久保は「陽さん、幽
霊はお金持っとらんよ」と返す。これはただのジョークと考えるべき
ではないだろう。何しろこの言葉はクライマックスの海岸での抱擁で
も繰り返されるし、思えばこの作品には金銭に言及したセリフが多く
みられる。視覚的には幽霊と人間の差異がその透過性からしかわから
ない本作において、現世と霊界の決定的な違いとして金銭が強調され
ている。交換において我々は金銭を含む何物かを媒介にしなければ、
互いの欲求を満たし合うことはできない。しかし、幽霊となれば無媒
介的に互いに触れ合うことができるのだ。「一回 100 円な」という萩
原利久のセリフは、触れ合うことなどできるはずのない存在を無媒介
的に触知してしまったことに対する未知の動搖を胡麻化すための照
れ隠しに過ぎない。

偽霊能力者の来訪に動搖しつつも、部屋の外に出る方法を知り、ベ
ランダにたたずむ久保史緒里は、急いで部屋に戻ってきた萩原利久に
デートを申し込む。デートをすることで恋愛が成就し、成仏して萩原
利久と別れなければいけないと知りつつも懇願する久保史緒里の演
技が素晴らしい。「相手、俺でいいの？」と問う萩原利久に「陽さん
とがえんよ」と答える久保史緒里は、相手をあこがれの対象として
ではなく、時間を共有した彼自身として見ていく。相手を理想化する
のではなく、相手がただその人であるからという理由で靈は人を愛す

久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない
—『左様なら今晚は』試論—

るのだ。

デートの終わりとともに別れが訪れることを悟りつつ、喜びと悲しみが入り混じった表情を見せる久保史緒里の演技は美しい。「いろいろを思い出せた。うちにとて、全部大事なことじゃった」「でも、もうええんじゃ、そんなこと」と言い、夕日をバックに萩原利久にハグを求める久保史緒里。この二人の抱擁の肩なめバストショットで泣かない人は、人間の名に値しないと思う。

そして抱擁しながら、萩原利久が「あれっ、元気なくない?」と、デートが終わってしまうことを悲しんでいる久保史緒里の心情を察知し、抱擁を終え、そのあと見つめ合うのではなく、久保史緒里がひたすら尾道の海の向こうの夕日を見つめながら男と受け答えをする。凡庸な演出家なら二人の顔のクロースアップの切り返しで処理したであろうが、この監督は違う。互いに向かい合っているようでも、久保史緒里は萩原利久とは違う方向を、来世を見つめている。

帰宅後、「またデートしようよ」という萩原利久に対し、二度目はもうないことを知りつつも、噛みしめるように「うん」と返す久保史緒里。そして次の彼女のセリフ「うち、今日のこと、一生忘れんと思う」を忘れずにおこう。休館日のシネマ尾道の前で、「また今度行こう」と、果たされるはずもないであろう約束を指切りげんまんで誓い合った二人が再びそこで再会するためには、久保史緒里がその記憶を来世でも保持し続けることが不可欠であった。だからこそ、「一生忘れんと思う」という久保史緒里の言葉の重みは計り知れないのだ。あの少々唐突であまりにも無邪気すぎる約束のシーンは、この一言によってその残酷さが露呈し、また救われもする。

久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない
—『左様なら今晚は』試論一

III 翻る白のワンピース、映らないスクリーン

そして久保史緒里が纏う白のワンピースは、紛れもなく劇場のスクリーンの白さと共に鳴り響き合っている。だからこそあの再会と呼べるかも曖昧なシネマ尾道でのラストシーンにおいて、スクリーンは決して画面に映ることはない。現前すべきスクリーンは、スクリーンに映し出されるスクリーンのシュミラークルではなく、あくまで久保史緒里が身にまとう胸部の起伏を欠いた白いワンピースであり、あくまで我々が劇場で見上げることになるスクリーンそのものなのだ。

こうして我々は、ある驚くべき仮説へと導かれる。久保史緒里の前世は、映画だったのではないか…彼女が演じる地縛霊は、自分が映画であることを忘れた映画自身のことなのではないか。そしてこの物語は、映画が映画たることの限界に直面することで、自分が映画であることを思い出す映画についての寓話であり、また意図も意識もすることなく映画に遭遇し、映像の生成と消滅というあの不意撃ちに見舞われ、それでも映画館へと導かれる一人の男の話なのではないか。

そう考えると、海岸でのクライマックスはなおのこと感動的なシーンとして我々に立ち現れてくる。多くのことを思い出したのにもかかわらず、「でも、もうええんじや、そんなこと」と前世の記憶を払いのけてでも目の前にいる男との思い出を忘れずにいようとする久保史緒里の身振りは、映画とは壮大な記憶装置を保持しつつも現在を生き続け、一回性をその都度更新しながら我々の前に現前してくれる夢のような存在であることを教えてくれる³。映画とは我々が訪れる場

³忘却と想起の装置である映画は、その観客たる主体にとってはほとんど夢と同じ機能を果たす。愛助の墓前で萩原利久は涙を流しながら「あんなことされると、全部夢

久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない
—『左様なら今晚は』試論一

所などではなく、向こうから我々に訪れる幽霊のごときものなのだ。

だが、そんなことはどうでもよいのである。幽霊と映画の構造上の類似など、この映画がもつ透明さの前にはとるに足らないことであるし、実際作り手たちがこれを意識していたかも問う必要はない。もっと言えば、無意識にこのような構造が出来上がってしまうという事態こそがこの映画の透明性に貢献している。そして久保史緒里の足元のクローズアップや潤む瞳、海岸で風にたなびく髪など、彼女の存在そのものを肯定する素晴らしいショットの数々を見れば、擁護のための饒舌な説明などはいらないし、現に映画はそれを拒否していることに気づくだろう。

我々はいつか映画館を出なければならない。そして映像の生き生きとした記憶は急速に風化し、それを思い出すために我々は何度も劇場に足を運ぶだろう。この文章が書かれるにあたっても、健忘症とそれがもたらす「映画は美しい」、「久保史緒里は美しい」などという絶望的な同語反復に抗うために何度も忘却と想起が繰り返された。しかしそれでいいのである。忘却は人間に許された特権的な身振りであり、今回は主演女優が某アイドルグループのメンバーであるということさえ忘れたとしても差し障りはあるまい。久保史緒里という名を与えた映画の記憶装置が、忘却と想起を繰り返す輪廻転生の非情なメ

だったんじゃないかなと思っちゃうよ」と気持ちを吐露するが、この台詞は夢としての映画の観客である我々が置かれた状況を代弁してくれてもいる。「映画と夢の関係は、しばしば漠然とながらも理解され、常識によって直ちに確認されてきた。映画の上映（projection）は夢を思い起こさせるのであり、映画は一種の夢、ほとんど夢であり、こうした類似は、夢を見た人が自分の夢をまさに語ろうとするときに、「まるで夢のようでした」と思わず言ってしまうという形でしばしば表現するものである。」前掲書 116 頁

久保史緒里は、自身が映画であることを忘れ、今それを思い出そうとする
日本映画がまとった世を偲ぶ仮の名前にほかならない
—『左様なら今晚は』試論—

カニズムを超えて、スクリーンの上で尾道の記憶を忘れずにいてくれ
るのだから。

自己喪失のための表現入門 vol.45

yuridoll

表現するとは何であろうか。「自己表現」という言葉がある。自己を表現することだ。自己とは何か。我々はしばしば「内なる自己」を求める。自分はどのような人間なのかということを考え、自己分析ということを試み、内省することがある。あるいは、自分に足りないものを追い求めることがある。そのような「内なる自己」など、存在するのであろうか。キエルケゴールは「自己とは自己自身に関係するところの関係である」¹と言った。自己の内に潜在的な自己などないのかもしれない。そうすると、自己は内からよりもむしろ外から引用されるものであり、「わたし」は自己を内的ではなく外的に経験しているのだろうか。

自己を捨て、世界をつぶさに観察することで入門できるデッサンと、他なるイメージを身体に取り込む舞踏によって、内なる自己という虚像を捨て去る、あるいはそのイメージを少なくすることができるかもしれない。

【デッサン】

デッサンとは、見たままの形や陰影を紙、すなわち二次元の表面に写し取ることだ。三次元の対象物を二次元の上で再構築することは、遠近法という名のイリュージョンを施すことだ。イリュージョンはどういうことかというと、見えるものの背後で見えないものの実在が失われ、主観的な感覚でとらえた芳醇な現実=リアリティが忘れ去られることだ。主觀性を排して客観的に世界を把握することが至上とされた遠近法主義の絵画に起こる現象だ。ただ、デッサンをしてみるとわかることがある。究極の観察が前提となること。線を引くことがな

¹ キエルケゴール、「死に至る病」,斎藤信治訳,岩波書店,1939,p20

いこと。描きたいように描いてはいけないこと。眼前の景色の陰影を忠実に写し取らなければいけない。無いものを描いてはいけない。これが意外と困難なのだ。なぜならば、意識が邪魔をするからだ。意識は、見慣れた象形から、眼前的景色を補足・修正しようとする。デッサンをする者は、意識を失わざるを得ない。意識というのが強烈ならば、意志と言ってもよい。意志のある存在は、世界を見たいように見るが、デッサンにおいてはそれが許されない。今ここにある身体の位置から見える、見させられている世界を、淡々とした純粋な観察によって写し取ること、それを一と時間を変えて何度もやってみること、それが、「今この身体はここにいる」という訴えであり、唯一無二の世界の観察者としての表現である。この訓練を繰り返せば、世界のありのままを引き受け、溶けてゆけるだろうか。

用意するもの：

目（視覚情報を得られる機能）、紙、鉛筆

やり方：

1. 切り取り対世界をじっと見つめる。
2. 鉛筆を持ち、紙の上に陰影を写し取る。このとき、物と物の境界線などを自分で決めてはならない。この世に線などないのだから。

【舞踏】

舞踏、それは、身体が従来の自己とは異なるイメージを纏う術だ。それは、身体が他者に操作されるということではなく、そこからの解放として実現する。身体が他社に操作されるというのは、日常の身体の使われ方のことである。普段、我々の身体は社会化・秩序化されているといえる。他者が指示するように動くこともあ

れば、社会が用意したシステムや道具に沿うように身体を動かしている。例えば、学校で「前ならえ」の姿勢をとれと指示されれば腕を前方に伸ばして身体の位置を前の人の真後ろに動かす。職場へ行くためという決定的な目的を持って目的地へ向かって歩く。会社から与えられたPCとい道具を動かすために、小さいキーボードの上で指を動かす。これらの身体の動きは、身体そのもの、つまり他者や社会に影響される以前の、存在としての身体の特性ではなく、社会によって秩序付けられたものであるといえる。このように社会化・秩序化された身体からの脱却を、躊躇において試みることができるのではないか。足の指先も考える力を持っていたのだ、靴に押し込められるまでは。また、社会化・秩序化されることに合意して、身体に「このように動け」という指示を送っているのは意識・頭脳である。他なるイメージを羽織ることで自己の意識・頭脳を後退させ、身体の自立性を取り戻せないだろうか。

用意するもの：

身体

手順【植物の変遷】：

- 1：種になる
- 2：種が割れ、芽が出てくる。
- 3：値を張る。根から水を吸い上げる。水を吸い上げるごとに成長し、大きくなる。
- 4：茎・つるが伸びる。
- 5：葉がつく。一枚一枚葉をつけていき、無数に茂る。
- 6：蕾になる。

7：花が咲く。水分をたっぷり含んで生き生きとしている。

8：枯れしていく。水分をたっぷりと含んでいた花の状態から、水分を失い、不安定になる。非常に軽くなり、茎についていられない状態になる。

9：綿毛になり、飛ばされる。風の吹いてきた方向に、縦横無尽に飛ばされていく。ここで、綿毛に意志や志向性はなく、ただ風に飛ばされる。

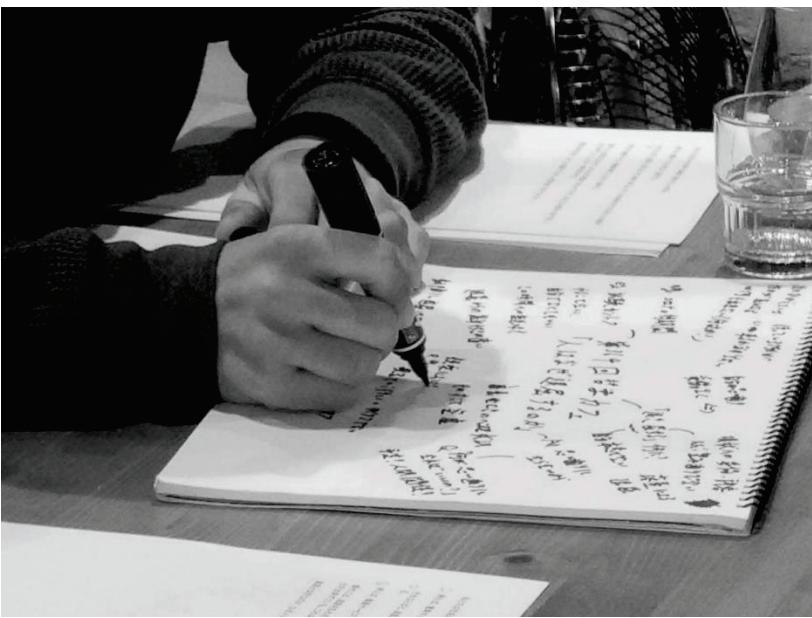
10：着地する。着地するときも軽い綿毛である。

11：再び種になる。

描こう、踊ろう、奏でよう、纏おう、失おう、自己とは他なるイメージを羽織っていくことで構築される幻想かしら

描こう、踊ろう、奏でよう、纏おう、失おう、表現するとは世界に溶かされることかしら

描こう、踊ろう、奏でよう、纏おう、失おう、それでもここにいる



虚ろな暇、充ちる生

Yu

1 前書き

研究の目途がある程度経ち、就活も区切りをつけてしまった大学院生に訪れるものは何か。「暇」である。数ヶ月の、何をどう過ごすことも出来そうな、無限の可能性に満ちた時間である。NETFLIX と YouTube にどっぷり浸かった自堕落ライフを送ることも出来たが、どうせなら何かしようということで対外発表とか冊子作製とか諸々取り組んできた。お部屋で静かに過ごして居ればよいのに、お家でじっとしていられない人間の典型である。^{*1}

さて、この度記念冊子を発刊するにあたり、自分の中の考えを自由に表現させてもらえる機会をえていただいた。折角数ページのお目汚しをする権利を頂いたのだから、何かないか何かないかと土壇場のドラえもんのごとく非整然とした脳内を漁ってみて思い至ったのが「暇と退屈」である。

2018 年ごろだったかに國分功一郎氏の著書『暇と退屈の倫理学』を初めて読んで以来、ぼちぼちな期間暇と退屈について考えてきた。4 年も 1 つのテーマを考えていると多少は思うところが出てくるので、この場をお借りして思索の彷徨の様を書き起こしてみようと思う。

しかし、ただ「暇と退屈」について云々するなら、それこそ『暇と退屈の倫理学』を初めとする先人たちの書を読めばいいじゃないという話になりそうなので、私なりの色をつけようと思う。

それが、「オルテガの『大衆の反逆』をかじりながら、より 21 世紀的な退屈を考えること」である。

『大衆の反逆』も私にとって縁深い一冊である。きちんと読んだのは大学生になってからだが、『大衆の反逆』のエッセンスがふんだんに盛り込まれている（と思う）アニメシリーズ『PSYCHO-PASS』は中学生の頃か

^{*1} パスカル『パンセ（上）』塩川徹也訳、岩波文庫、2015 年、p162

らのお気に入りの作品である。特にあるシーンでの、敵がパスカルの『パンセ』を引用して作品の中の世界を揶揄するのに対し、主人公がオルテガの『大衆の反逆』の引用で返すという、銜接性ここに極まれりと言うべきやりとりは中二的にめちゃめちゃポイントが高い。

今回はその『大衆の反逆』で述べられている、20世紀のヨーロッパに現れてきた「大衆」と呼ばれるタイプの人間たちが生きてきた要因についての辺りをかじりつつ、現代人の向き合う暇や退屈とはどのようなものかについて書き連ねようと思う。読者諸氏におかれでは、宙より広い心と海より深い懐と十分な暇を以て、拙稿を読んでいただけたとありがたい。

最後に大雑把に本稿の構成を述べておく。2章では『暇と退屈の倫理学』で語られている「疎外」と「退屈」についてまとめてみる。3章では時代をしづって、21世紀を生きる人々の特徴がどのようなものかを『大衆の反逆』に触れつつ述べてみる。4章では前章に続いて21世紀を生きる人々の様子を描写し、さらに2章と3章で述べた退屈像、21世紀像を踏まえて、私たちが向き合う退屈によって引き起こされる不幸について考えてみる。5章はおまけである。

2 疎外と退屈

さて、これから本稿全体としては退屈について云々していくわけだが、それにはまず、「退屈とは何か」という定義から考えていかねばならない。本章では前書きにも名前を挙げた、『暇と退屈の倫理学』における退屈の分析、分類に従って話を進めていこうと思う。

まずは『暇と退屈の倫理学』の概要を説明しよう。この本では、人類が豊かさを目指して進む過程で直面した、暇のなかでいかに生きるべきか、退屈とどう向き合うべきかという問い合わせについて考えている。^{*2}

^{*2} 國分功一郎『暇と退屈の倫理学 増補新版』 太田出版、2015年、p24

学者をはじめとする様々な分野の人々の考えを参考にしながら、多くの観点から分析が試みられており、正に暇と退屈論の見本市のような本だ。

その中でも今回は特に、第4章の「暇と退屈の疎外論」と第5章の「暇と退屈の哲学」に注目してまとめてみる。

第4章においては、タイトルの通り「疎外」という概念を扱っている。疎外の何たるかを、哲学史上での「疎外」の扱われ方と関連付けながら説明した後、さらに「本来性なき疎外」を考える重要性を述べている。

疎外とは一般的に、人間が本来の姿を喪失した非人間的状態のことを指す。^{*3} 疎外された状態は人に「何かちがう」「人間はこのような状態にあるべきではない」という気持ちを起こさせる。^{*4} さらにそこから、「人間は本来はこれこれであったはずだ」というように考えさせる。つまり、疎外とは本来性や本来的なものを人にイメージさせる概念だということだ。^{*5}

この疎外の定義ゆえに、哲学の場において疎外を論ずることが次第に避けられるようになった。先の説明に則ると、疎外された人間は「人間とはこのようであるべきでない」と考えることによって、今の自分自身を人間ではないとみなしているということになる。このように考えてしまうことが極めて危険なことであるとみなされ、疎外の概念は次第に遠ざけられるようになったというわけだ。

『暇と退屈の倫理学』では、ここからさらに踏み込み、「本来性」の概念が危険であるからという理由で「疎外」の概念をも捨て去るべきではないと主張している。疎外された者に対して、その者の「本来の姿」を提示してしまうことが問題なのであって、「疎外」の概念そのものが問題なのではないのだと。

そこから、ジャン=ジャック・ルソーやマルクスの思想に基づいて、む

^{*3} 同前、p170

^{*4} 同前、p171

^{*5} 同前、p171

しろ本来性を想定することなく疎外を考えるべきであり、疎外が人にもたらす退屈を考える際も本来性なき疎外という枠の中で論じられねばならない、と述べている。^{*6} これが、第4章「暇と退屈の疎外論」でごく大まかに述べられている内容である。

続いて、第5章「暇と退屈の哲学」について説明しよう。この章では、20世紀の哲学者、マルティン・ハイデッガーの著書『形而上学の根本諸概念』を引用しつつ、退屈とは何かということに切り込んでいる。それによると、退屈には2つの重要な要因と3つの形式が存在する。

まずは退屈において重要な2つの要因から述べよう。〈引きとめ〉と〈空虚放置〉である。

〈引きとめ〉とは何か。これは自分の望む通りの速さで時間が過ぎてくれないために時間を長く感じてしまい、その結果時間がぐずつき引きとめられているような感覚に陥ることである。例えば、今まさに電車に乗りたいがその到着は4時間後である。だが、特にやることもないために時間がゆっくり過ぎるように感じる。というような状況である。

続いて、〈空虚放置〉である。これは、何もすることがない、やるべきことがないむなしい状態に放って置かれることを指す。

続いて、退屈の3つの形式について考える。どのようなものかというと、

1、何かによって退屈させられること。^{*7}

2、何かに際して退屈すること。^{*8}

3、なんとなく退屈であること。^{*9}

この3種類である。

まず、退屈の第一形式、「何かによって退屈させられること」とはどうい

^{*6} 同前、p203

^{*7} 同前、p214

^{*8} 同前、p214

^{*9} 同前、p244

うことか。

これは、自分の周りにある物が私たちが期待しているものを与えてくれない。^{*10} 望む通りにしてくれない状態に嵌ってしまうことで生じる退屈である。

ハイデッガーはこの説明のために、列車を待つ人の例を挙げている。4時間後にやってくる列車を待つ人が暇を持て余し、様々な気晴らしをしてみるものの退屈に陥ってしまう。これは、自分の周りにあるものが自分の最も求めるもの、すなわち列車を与えてくれないことで<空虚放置>や<引きとめ>の状態に嵌まることで生じている。これが第一形式の退屈の概要である。

二つ目の形式は「何かに際して退屈すること」である。

この形式では、自分が「何か」に際して退屈しているのと同時に、その「何か」が暇つぶしの気晴らしになっている。^{*11} 退屈と暇つぶしの気晴らしが独特な仕方で絡み合っているのが特徴である。

第一形式においては、私たちの目の前に私たちを退屈させる何かがあり、それに対抗しようと特定の行為、すなわち気晴らしを行う。しかし第二形式においては、私たちは退屈なものを何も見出さない。にもかかわらず、自分の際している状況全体が退屈に逆らって動員されている。^{*12}

この形式の説明のためにもハイデッガーは具体的な例を挙げている。夕方にある招待を受けた人の例である。慣例通りの食事を楽しむ。同じく招待を受けた人と談笑する。そしてリラックスする。この招待において退屈なものは特に見当たらない。会話も、人々も、場所も、退屈ではなかった。だから満足して帰宅した。そして帰宅して気づいた。自分はこの招待に際

^{*10} 同前、p223

^{*11} 『形而上学の根本諸概念 世界-有限性-孤独』ハイデッガー全集第29/30巻、川原栄峰、セヴェリン・ミュラー訳、創文社、1998年、p188

^{*12} 同前、p188

して退屈していたのだと。^{*13}

この例では、招待に際して退屈しているのと同時にこの招待そのものが暇つぶしであり気晴らしとなっている。もともと気晴らしとして作られた催しなのだから、その中に特定の退屈なものは見出しそうもない。それでいて、この招待そのものに退屈していたのである。

三番目の形式は、「なんとなく退屈であること」である。これは、三つの形式の中で最も「深い」退屈である。この形式の退屈に対しては気晴らしをすることが許されない。心の中から響く「なんとなく退屈だ」という声に耳を傾けざるを得ないように感じる。そして自分と周りにあるものが全く同然一律にどうでもよくなる。これが退屈の第三形式である。^{*14}

これら 2 種類の要因と 3 種類の形式が、ハイデッガーの提示した退屈の大枠となる。これらの分析は、具体的な個々の状況がどの形式に当てはまるかを考えると少し線引きが難しいが、説明としては大変分かり易く私たちにも受け入れやすいものであると思う。これによって、一口に退屈と言っても様々な特徴があり、どの退屈の状態にあるかによって、それ即ち私たちがどのような状態にあるかが分かった。

3 無限と有限の狭間で

ここからは、前章でまとめたことを踏まえつつ、私たちが生きる 21 世紀により焦点を当てた少し特殊で時間局所的な退屈論を考えていきたい。

そのために、ここで私が思う 21 世紀的要素を 2 つ挙げ、それぞれどのような特徴があるのかを述べてみようと思う。その 2 つとは「IT 化による生の増大」と「より良き生を送らんとする意志」である。

まずは「IT 化による生の増大」からだ。IT 化については、あまり説明

^{*13} 同前、p182、183

^{*14} 同前、p230

の必要はないかもしれない。どのような定義をすることも出来そうだが、私たちは日々情報社会に生きているということを経験的に実感している。

インターネットを通じて情報の海へとダイブし、いつでもどこでも自分の必要な情報へとアクセスすることが出来る。また、メールやブログやSNSなどを通じて、自分の方から情報を発信することも出来る。

さらに、回線速度の高速化も助けとなり、私たちが一日の間に触れる情報の量も増加した。それどころか、今や私たちの一生を費やしても扱いきれない程の情報が目の前を飛び交っている。IT化によって齎された事実上無限の情報は、私たちにとって当たり前な日常の一部であると言って差し支えないだろう。これは20世紀以前の世界には無かった世界の様子である。

IT化の何たるかについては、これくらいにしておこう。続いて「生の増大」についてである。

これは20世紀の哲学者である、ホセ・オルテガ・イ・ガセットの著書『大衆の反逆』から引用したものである。この本では、20世紀前期にヨーロッパに急増した「大衆的な人間」の分析がなされている。彼の言う「大衆」とはものすごく簡単にまとめてしまうと、皆と同じであることを望み、自分自身に多くを求める事のない満足しきってしまった人間を指す。オルテガはこうした人間たちが増加した根本として、「生の増大」という要因を挙げている。

オルテガの生きた20世紀には、既に紙メディアを通じて自分の住んでいるところから遠く離れたところで起こっている出来事を人々が知れるようになっていた。正に、遠くのものが近くになる、不在のものが現前する、というわけだ。^{*15} これは空間的だけでなく時間的にもそうであり、映画や新聞といったメディアによって古代の帝国や文明の姿が人々に伝えられた

*15 オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』、佐々木孝訳、岩波文庫、2020年、p102,103

ことなどが例として挙げられる。

こうして20世紀の人々は空間と時間を抹殺することを通じて、比喩的な意味において以前より多くの場所にいることを可能にし、短い生的時間により長い宇宙的時間を消費することを可能にした。^{*16} そしてこのことは、人々に「自分にとって可能なことはこれこれである」という意識を増大させる。

オルテガ曰く、”私たちが生きているということは、状況としていくつか特定の可能性を前にしているということと同じなのだ。そしてこの選択・決断の可能性という領域は、普通「環境」ということと同じなのだ。(中略)世界とは私たちの生の可能性の集積に他ならない。”^{*17}

生きている私たちの前には常にいくつかの可能性があり、この可能性の集積こそが私たちにとっての世界であると言える。20世紀のヨーロッパではそれまでの時代と比べ物にならないほど人間の主観的能力、可能性が増大した。それは言い換えれば、世界が広がったのだ。このことこそ「生の増大」の意味するところである。

そして、21世紀においても同様に生の増大があったと考えられる。それを齎したのがIT化である。かつては限られた専門家しか扱っていなかつたはずが、今や誰もがPCやスマホを所有し簡単にインターネットに接続し、情報の受信や発信を行える。世界中のどこで誰が何をして何が起こっているのか、20世紀とは比較にならない量の情報が恐るべき速さで手に入る。そして、自らのもつ情報を整理し発信すれば、誰でも簡単に小さな有名人になれる、遠くの人と知り合える、新しい仕事を生み出せる。21世紀における「生の増大」は、20世紀のそれに劣らず人々に自身の可能性の意識を拡大させたと言えるだろう。

ただ、ここで注意しなければならないのは、あくまで可能性の幅が広

^{*16} 同前、p104

^{*17} 同前、p106

がっただけであり、実際に実現させられる可能性はそのうちの極僅かに過ぎないということである。これは、人間が多くの可能性の中から實際には一つを選択して行動するという意味でもそうであるし、人間に与えられている時間の長さという意味でもそうである。

目の前には、自分の一生を全て費やしても処理しきれないほどの情報で溢れている。一方で、我々に与えられた時間はあまりに短い。人はいずれ死ぬ以上、生きている間に触れられる情報の量には限界があり、そこから実現できる可能性の数にも限りがある。また、わざわざ死に結び付けずとも、我々が自分達の有する時間の短さを感じる時はしばしばある。例えば、学生でいられる期間などもそうだろう。「学生でいるうちに好きなことをしておけ」というのはよく聞く言い草だが、これは働き始めると学生のときのように時間を自由に使えなくなるということだと捉えられる。

このように、私たちには実質的に無限とも言うべき情報が与えられる一方で、相対的に極めて有限な時間しか与えられていないことが分かる。主観的にも客観的にも、この無限と有限のギャップは極めて大きい。情報技術の発達した社会に生きる私たちは、常にこの大きな溝に悩まされながら生きることとなる。これが現代の特徴その1、「IT化による生の増大」の概要である。

4 期待、疎外、不幸

さて、悩ましい程の情報と時間の量的な差に直面した人々はどうするか。ここに、現代のもう一つの特徴として挙げた「より良き生を送らんとする意志」が働くのではないかと思う。

ここで考えるべきことが一つ、「より良い生を送る」とはどういうことを指すのだろうか。とても難解な問い合わせであるが、先の情報と時間の量的ギャップに注目すると一つ答えらしきものが見出せる。それは、「自分の

有する時間を有意義、有意味に過ごすこと」である。

自分にとって最も有意義な時間の使い方は何であるかを、各瞬間瞬間ごとに考え、実行しようとする。これはつまり、自分にとっての時間対効用を最大化できるように行動するということである。自分に与えられた時間が有限であるという厳然たる事実があるが故に、まず受け入れその上で僅かでも有意義に生きようというわけだ。最近しばしば聞くようになった「タイパ」という概念は、この考え方を突き詰めたものであるとも言えるだろう。

さて、ここまで 21 世紀を生きる人々の特徴を 2 つ程挙げてみた。改めて整理してまとめてみよう。IT 化により人々の目の前に無数とも言える可能性が広がる。一方で、人に与えられた時間は短く実現できる可能性も有限である。ゆえに人々は自分の時間を有意義に過ごせる可能性を選択し行動しようとする。

ここまでだと、現代の人々は厳しい現実に直面しつつもとても前向きに生きようとしており、そのこと自体は良いことではないかと思えるわけである。

しかし悲しいかな、現代人は正にその前向きさと有意義な生を送ろうとする意志故に、退屈に見舞われるのではないかと私は考える。長らくお待たせしたが、ようやくここから 21 世紀を生きる人々の向き合う退屈について考えてみる。

先程、より良い生を送らんとする意志によって人々は、有意義な時間の過ごし方を考え実行しようと述べた。この「考える」と「実行する」ことの二つの行為において、現代人の有すると思われる尊ぶべき意志は、退屈という挫折を強いられる危険性がある。

無数の情報によって喚起される無数の可能性。それに対する人間の有する時間の有限性。この無限性と有限性の溝をなんとか埋めようとして人々は、限りある時間(生)を僅かでもより良く、僅かでも有意義なものにしよう。

うと考える。

しかし、そもそも有意義な時間の使い方とは何だ。それが分からぬことにはどうしようもない。時間を有意義に使うためには、まず自分にとって意味あること、価値あることとは何なのかを理解しておかなければならない。それを把握することで初めて、意味ある時間の使い方を考えられるようになるのである。

また、考えるだけではまだ足りない。考えた上で実行しなければ意味ある時間は生まれない。しかしこれも世の常だが、自分が考え企図したこと、期待したことがいつもその通りに実現するとは限らない。例えば、遊びに行く計画を立てていたのに、急な仕事が入ってしまった。或いは、実際に遊びに行くことは出来たものの、期待していたほどの面白味はなかった。どちらもよくあることである。

有意義な時間の使い方は分かるが、結果的に自分にとって無意味としか思えない時間の使い方しか出来なかつた。つまり、有意義な時間の過ごし方を考えることには成功したが、その実行に失敗することもあり得るのである。

このように様々な要因から、意味ある時間の利用の試みは失敗する危険性がある。そして、本当に失敗してしまったときにはどうなるだろうか。人は自らの過ごす時間、すなわち生の無意味さに空虚さ、むなしさを感じるかもしれない。これは先の章で言うところの＜空虚放置＞と言えるだろう。さらに、自分の周りの世界への関心が徐々に薄れていくと、時間が止まっていくような感覚に陥るかもしれない。これも先の章の＜引きとめ＞に似ている。こうして、意味ある生を考え、実行することの失敗が退屈へと繋がるのではないだろうか。

とは言え、再び有意義な時間の使い方を考え、実行する余地があるうちはまだ退屈から脱することが出来る。一度上手くいかなかったからといって諦める必要はない。より良い時間の使い方が出来るまでトライアンドエ

ラーを繰り返せばいい。

これはハイデッガーの分類における、退屈の第二形式に似ている。『暇と退屈の倫理学』では、第二形式の退屈は私たちの生活に最も身近な退屈であり、生きることとはほとんど退屈と気晴らしがない交ぜになつた何かに際し続けること、臨み続けることであると述べられていた。^{*18} 例え退屈したとしても、自分にとって意味ある生を生きようと挑み続けること。それこそが正に生きることだということも出来るだろう。

そしてハイデッガーが言うように、この第二形式の退屈に臨み続ける生き方には「安定」と「正気」がある。自分にとって意味ある生を生きようとし続けることは、自分自身であり続けようとしているとも言えるだろう。

ところが、意味ある時間の使い方が思いつかなくなった、或いは考え実行することを諦めてしまったときは危険だ。そのときは、自らの生に一切の意味を見出せなくなるだろう。その結果、周りの世界は動きを完全に停止してしまう。〈空虚放置〉と〈引きとめ〉による退屈の到来である。

これは先の第二形式の退屈とは異なる。第二形式のときは、たった今現在の自分が直面している状況に際して退屈しているだけである。自分に意味ある時間の使い方を新たに考えることが出来ればそこから脱することができる。

しかし、意味ある生の実行を挫折してしまった人の退屈は、自分の現在の生の意味を感じられないことだけでなく、生の可能性そのものを見出せないことに関係する。自分の生の可能性とは、世界との連関によって成り立っている。つまり、自分の生の可能性を見出せないということは、自分自身も世界も等しく空虚となることに通ずる。これはむしろ第三形式の退屈である。

^{*18} 國分功一郎『暇と退屈の倫理学 増補新版』太田出版、2015年、p241

しかも、意味ある生の可能性が見出せないということは、現在だけでなく未来に対しても自分の生に意味を見出せないということだ。ここに陥ってしまった人の世界は一気に止まったように見えるだけでなく、再び動き始めるようにも思えないであろう。

現在のみならず未来にまで続くように思われる第三形式の退屈。これが現代人の直面する退屈の実態ではないだろうか。

さらにここから話を進めて、現代の退屈と絡まっているある不幸の形についても考えてみたい。

現代人の行動の一切が、限りある時間をより有意義に、有意味に過ごそうという渴望によるものである以上、そこには意味ある生の実現に対する「期待」がある。これは、目の前にある可能性が実現してほしいという願望に基づくものだ。

めでたく可能性が実現すれば、それはそれでよい。生は意味を持ち、充足する。問題は、可能性の実現に失敗したとき。すなわち、退屈に見舞われたときである。

退屈しているときは、より良い生への試みが失敗したとき、つまり期待していた生の充足が得られていない状態、自分が期待していた「こうなったらしいな」が実現できなかったときである。

このときに、もともと有していた期待を直ぐに捨て去ることが出来る場合は良い。それは新たな可能性を探し、再びより良い生の在り方を模索することが出来るようになることを意味する。つまりそれは第二形式の退屈に向かい合いながら生きる、自己の安定のある在り様だ。

だが一度抱いた期待、「こう在りたい」という在り方を実現できず、さらにその期待を捨て去ることが出来ずにいると、その期待は「こう在るべき」という本来性へと変貌する。そして、「今の自分はこう在るべきではない」という考えへと突き進む。

このように、より良き生を求める試みが挫折することで生まれる退屈は、

かつての哲学者たちが疎外の概念もろとも抹殺しようとした本来性の概念に通ずるのではないだろうか。自分自身を自ら否定してしまう、これほど不幸せなこともないだろう。

加えてこの疎外は、現在だけでなく未来にまで長く続くように思われる疎外である。あらゆる生の可能性までもが否定されてしまっている以上、現在の自分から「こう在るべき本来の自分」へと変わっていく可能性も否定されてしまっている。つまりはこの退屈のもたらす不幸とは、現在だけでなく未来までもその射程に収めた非常に厄介な不幸であると言えるだろう。

5 最後に

まずは、ここまで読み進めていただいた方に深く感謝申し上げる。何分このような文章をこれだけ書くことは初めてだったので、読みにくい部分も多々あったかと思うが多少なりとも楽しんでもらえていると幸いである。

ついでだから言わせていただくと、この章までたどり着いている時点であなたは相当に暇人である。書く方が書く方なら、読む方も読む方である。

さて、最後に一つお尋ねしようと思うが、あなたは拙稿を読まれている最中にどのような気分だったであろうか。この文章は、あなたのより良き生の実現のための企図や期待に応えられたであろうか。

もしご期待に沿えず退屈させてしまったのなら大変申し訝ない。今すぐにでもこのページを閉じてほしい。そして出来ることなら、この冊子の他のページに目を通してみてほしい。

無論、ここへご寄稿いただいた皆様は、決してあなた個人の暇と退屈のお世話のために作品を練られたわけではない。だが、『dia-』の放つ多様な彩りの中から、きっとあなたの時間をより良く彩ってくれる一行、一作が見つかることだろう。

虚ろな暇、充ちる生

それでは、続きを楽しみくださいませ。

哲学から考える「人生」

高橋涼香

哲学から考える「人生」

ドイツの哲学者 イマヌエル・カントは言った。

「「哲学 philosophy」は、学ぶことができない。学ぶことができるのは「哲学する（こと） philosophieren」だけである。」

しかしカントはその「哲学すること」を「理性の能力を練磨すること」としか語っていない。

それでは、「理性の能力を練磨する」とはいかなることなのだろうか。

私が考えるにそれは、さまざまな哲学者の言葉から自分の哲学を見つけていくことである。

そこで、ここではさまざまな哲学者の名言を紹介しよう。

この中に、「座右の銘」なるものが見つかるといいが。

『樹木にとって最も大切なものは何かと問うたら、それは果実だと誰もが答えるだろう。しかし、実際には種なのだ。』 by ニーチェ
(結果ばかりを求めず、見えない部分の重要性を忘れてはいけない。そこに至るまでの努力や行動を起こす動機となった事を忘れてはいけない。)

『人は、常に前へだけは進めない。引き潮あり、差し潮がある。』 by ニーチェ

(常に前進している人などいない。前進・後退しながら進んでいくのが人間である。)

『すべては疑いうる。』 by マルクス

(何一つ確かなものはない。)

『いかなる財産も、ちょっとしたチャンスに手に入れたものである。』

by ショーペンハウアー

(チャンスに対する考えは人それぞれ。)

『笑いは消化を助ける。胃散よりはるかに効く。』 by カント

(笑うことは心身に良い影響を与える。)

『すべての不幸は、未来への踏み台にすぎない。』 by ルソー

(人生では時に、目を塞ぎたくなるような不幸が訪れる。しかし、時は流れ続けていく。)

いかがだっただろうか。最後に、「onecafe」についてアリストテレスが何かを言いたいようだ。

『物事を学ぶのに、決まった方法はない。』 by アリストテレス



木漏れ日を拾う

Yui Takano

目が覚めたのは昼下がりで、窓から差し込む日光に呼び起こされるように瞼を開いた。身を捩るとビニールががさがさと擦れる音がする。どうやら終わりの見えない部屋の片づけに辟易して、いつの間にかごみ袋にもたれかかって寝ていたらしい。

部屋は辛うじて床が見えるぐらいで、積読の山が崩れて本が散乱している。変な体制で寝ていたせいでこわばった身体の緊張を解くよう伸びをすると、黄色の面積が極端に少なくなったバナナが目に入った。追熟をあらわす茶色い斑点は全体に広がっていて、あと一步で腐敗のステージに入りそうな様子である。

その時、視界の端で何かが動いた。とっさに目を向けると、虫。クモが床を歩いていた。

反射的に逃がさなくては、と思って伸ばしかけた手を止める。果たして、この選択はクモにとって良いことなのだろうか。

もしかしたら私の自堕落さを嗅ぎつけて、散らかった部屋から餌が発生する可能性を見込んだ上で巣を張りにきたのかもしれない。目の前で荒廃しつつあるバナナがいい例だ。これだって、放置しておけばいずれ虫が湧くだろう。あるいは、クモにも何かしらの絶望があって、たまたま行き着いた本の山に潰されようと、雪崩が起こるのをじっと待っていたのかもしれない。分からぬ。私は、クモではないから。霊長類と節足動物、人間とクモと種族が違うのはもちろん、そもそもクモと私は違う存在なのである。

人間と人間でも同じだ。心が目に見えないのは周知の事実で、それでもコミュニケーションが成立しているうちに、人の心が分かったような気になってしまう。しかしそれらは相手に対して行った自身の主観的な解釈の結果にすぎず、相手の心そのものではない。一端を掴んだつもりになったとしても、自他の境界を意識したとき、相手をそのまま理解することへの難しさに打ちのめされそうになる。

確かに分かるのは、分からぬということだけだ。

クモを見つめて、念力で「あなたはどうしたいのですか」と問いかけてみる。無論返事はなく、クモは変わらず床を這っている。やはり、私にはまだテレパシーは使えないようだった。

クモの意に反していたら申し訳ないけれど、気づいてしまった以上、不用意に踏みつぶしてしまうことが怖くて、クモを部屋から連れ出すことにした。何がクモのためになるかを考えながらも、結局導いた結論は非常に恣意的だ。内心でクモに謝りながら、紙の上に誘導する。

外に出て、隣の公園にクモを放しにいった。土に映る、まだらな木漏れ日の間を縫って、クモは進んでいく。

もし、これでクモを助けたことになっていたら、「蜘蛛の糸」のカンダタよろしく、いつかお釈迦様が天から糸を垂らしてくれるだろうか。それとも、夢枕に立って「あのときは……」と小さな恨み言とともに不吉な予言を残してくのだろうか。あるいは、そもそも何も思っていないのか。

結局、何が正解だったのかは分からない。

分からぬことしか、分からぬ。

それでも、できるだけ汲み取ろうとしていたいと思う。「分からない」ことは、分かり合えることへの余地でもあるからだ。

枝葉が取りこぼした日光を拾うように手を広げる。点々と降り注ぐ木漏れ日は心のように、目に見えていながらも、実体を持っておらず掴むことはできない。ただ手の中に残る陽の光の暖かさを感じながら、手を握りこみ、片づけを再開させるために部屋に戻った。

対話を

大庭裕之

私の名前は早乙女亜紀。今年、2015年の3月に女子高を卒業したばかりの18歳の女の子です。春からは、私立明秀院大学の心理学部教育学科に通う大学1年生です。

私の家族構成は、父母と2歳下の妹の4人です。家庭はどちらかというと裕福ですね。父は大手自動車メーカーの本社勤務で部長をしていて、母は専業主婦です。父は仕事と家庭を両立できる人で、夏休みには旅行に連れて行ってくれたりと、家族サービスを欠かさない自慢の父です。母は社交的で、週に一回程度、喫茶店で友人とお茶をしに外出するのが習慣です。また、母はピアノを趣味としているお洒落さんでとても素敵な自慢の母です。妹は私立の進学校に通う高校2年生で、今、有名大学に受かるために頑張っています。妹は負けず嫌いで、私とは些細なことでたまにケンカしますが、仲は良いです。

こんな環境で育った私は今まで何の不自由もなく暮らしてきました。だから、私が大学に通う理由も、教育学科を志望した理由も、特に何もありません。なんとなく進学しました。強いて言えば、大学は偏差値を基準に就職に困らないところを選び、「子どもはかわいい」と思ったから、教育学科を選びました。それだけです。理由なんてありません。

大学卒業後については、教師になることを考えています。というのも、私の通う教育学科は、小学校教員の免許状が取得できるからです。だから、卒業後はなんとなく教員になると思っています。

こんな感じで、私はなんとなく生きています。私は、なんとなく大学に行って、なんとなく就職して、なんとなく好きな人と結婚して、なんとなく老いていくんだろうなと思っています。

しかし、ある日、そんな私は、私と全く正反対で異質な「神宮寺涼介」という不思議で変わった人と出会い、私は自分の生き方に問い合わせを持ち始めます……。

— 噂の男 —

大学の授業が始まって一月程たった5月10日、17時から始まる6限の「教育心理学」の授業に出席した私は大学の授業に辟易していた。

授業が始まり、私はテキストを見るなり、さっそく億劫になっていた。今、授業でピアジェの認知発達段階説という理論をやっていて、教授がその理論をひたすら説明している。この理論は、乳幼児から児童の認知がどのように発達していくかを説明している理論であるが、これを知ったからといって何か得するわけでもない。正直、私にとってはどうでもいい理論だった。周りの学生は私と同じように考えているのか、周りの学生も教授の説明を真面目に聞いている人はいないようだ。

「なんかかったるい……すごくつまらないな。はやく授業終わらないかな。帰って遊びたい」

私は心底そう思った。大学の授業は、もともと無気力な私を、ますます無気力にさせて怠惰にさせていった。

「大学の授業なんて、なんの意味があるんだろう。何の役に立つのだろう」

授業中、そんなことを考えた。

そんなことを考えていたその時、隣の席の二人の女子の会話が私の耳に入ってきた。

隣の子達が話す。

「この学科の1年に、10歳ぐらい年上で悪魔みたいな男がいるのだと。そんな人が教師を目指してんんだって」

「知ってる。黒い革ジャンを着ていていつも黒尽くめの格好をしている。そして、目つきが悪く、どす黒いオーラを放っている人。噂だとあれは、育ちが悪く、殺人以外はもう全てやってるとか……そんな話がある」

「なんか、その男、女探しをしているらしく、女子を手当たり次第漁つてるらしい。名前は神宮寺涼介というのだと」

「怖いね。狙われたらヤバい。狙われないように気をつけようね」

隣の女の子達の噂話を聞いて、私はその男に興味が湧いた。

「何それ！面白そう！」

その男の存在は、私に未知なるものへの好奇心を湧き立て、私の冒険心をうずきたてた。

6限の授業が終わった19時頃、陽が落ちてもう暗くなっていた。しかし、私は強い好奇心から神宮寺涼介をすぐに探した。すると、黒尽くめという特徴から、神宮司涼介の存在は一目でわかり、見つけることができた。彼は、隣の教室で授業を受けていたようで、校舎を出るところだった。神宮寺涼介は髪が少し長めで、黒い革ジャンと黒いロングブーツを身に着けており、全身黒尽くめの格好をしていた。彼は「俺に近づくな」という目つきで、近寄り難いオーラーを放ちながら歩いていた。どうやら、喫煙所の方に向かっているようだ。

「不思議な人だな……」

私は彼を見てそう思った。

教師とは程遠いあのような人がなぜ教師を目指すのか、私は彼を見てますます興味が湧いた。

「よし、声をかけよう！」

私はそう思い、彼に声をかけようとした。が、しかし、すぐに躊躇ってしまった。

「あの人があなたが本当に人殺し以外全部やってたらどうしよう……。本当に悪い人だったら……私、あの人に襲われて、あんなこと、こんなことされるのかな……」

私は悪いことを考えてしまい、躊躇してしまった。

「……」

しかし、躊躇していては何も始まらないと考え、私は不安を振り切って、勇気を出した。私は神宮寺涼介にダダッと駆け寄り、私は少し強張った声で、彼に話かけた。

「あの……神宮寺さん？！」

神宮寺涼介がこちらを見る。

「ああ？」

神宮寺涼介の狼の様な目がこちらを向ける。

彼は非常にイライラしているようだった。しかし、それは単純な苛立ちをぶつける目ではなく、寂しさと悲しみを交えた複雑な苛立ちをぶつける目であった。

私は神宮寺涼介に声をかけた。しかし、私は何を話せばいいかわからない。しかも、彼はイライラしているようだったので、私はますます困惑した。しかし、私は本能的に本音を話すことができた。

「あ、ごめんなさい…い、いや、面白そうだから、話聞きたいなと思って……」

私は恐る恐るそう伝えた。すると、それを聞いた神宮寺涼介はこう答えた。

「は？……何が、面白そうだ！」

彼の目つきが鋭くなり、彼の黒いオーラーが増した。彼は私の言葉が気に入らなかつたらしい。

「え？えっ……？」

何か悪いことを言ってしまったのか。私はそう思いながら、戸惑い、困惑した。

「……」

彼は、私の戸惑いの表情と言葉に反応したのか、無言でいる。

私はなぜ、彼の怒りが増したのか理解ができない。わからない。次第に、私の彼に対する感情は、関心から恐怖に代わりつつあった。

「……」

彼は、私の様子を見て、とても悲しそうな表情をした。

そして、その後、彼は険しい顔をしながら私に背を向け、一人喫煙所の方へと歩いて行った。



陶醉

陶醉

朔

顔の中心にフッと力を入れると、頭の上からウレタンで出来たようなうさぎの耳が姿を現した。骨や筋肉はどうも内蔵されてないみたいで、しようがないのでたまに握ったり捻ったりして感触を楽しんでいる。

口はない。しゃべらないから大丈夫。

目もない。見えているから大丈夫。

重苦しいシャッターがカラカラと開いていく。少しずつ光が当たって中に焦点が定まっていくと、赤い光が灯っているのがわかった。現在 136°C。ちょうどいい。ポケットに捩じ込んできた革手袋を手に嵌めて、蓋を開ける。おっと、先に電源を切らなければ。つまみを左に回して、点灯していたランプと文字盤を静かにする。蓋は片手で上げられるギリギリの重さで、取手に手をかける度、えもいわれぬ緊張に襲われる。一気に上まで押し上げると、中の様子がはっきり見えるようになった。

「うわーーー！！」

「つめてーー！！」

「いきなりあけんなよ！びっくりしたじゃん！！」

ごめん、ごめんて。この上なくやかましいピーチクパーティクは、逆に成功の証拠なので内心ほっとしながら一人ごちる。

おっ、いい色になったね。

「そーだよ！しがらきにゆてきてんもく！やっぱこんぐらいかけないと！」

厚がけでもあまり垂れてないね。もう少し垂れがあっても面白かったなあ。もっと厚がけしても良いのかな。

そっちの君は…トルコ青釉だっけか？

「トルコあおガラスゅう！じぶんでじっけんしたんじゃん！」

そうでした。ということは隣の君が？

「そ！トルコあおゆう！どうよ！」

二人とも綺麗だね。垂れもいい感じ。似ている名前だけど色が全然違う。面白い。

「おれもみてー！」

「やけたよー！」

騒々しいことこの上ない。日々に自分のことを教えてくれるひよこたちを、落とさないように板に整列させる。

ぴん、ぴん、ぴん。

「わってきた！」

貫入だね。綺麗な音だ。

夢を見てくれる音が微妙に響いていく。

ぴん、ぴん、ぴん。

ピーチク、パーチク。

ぴん、ぴん、ぴん。

幸せな音が砂埃とともに消えていく。

再び顔に力を入れると、人間の顔になった。これで口が出てくるからお昼ごはんが食べられる。

もうちょっと冷めたらおうちに連れていくよ。

そう言ってひよこを撫でると、いのちの温度が手のひらに広がる。

とくとく動く心臓なんて持っていないのに、ひよこたちは人間よりも賑やかで、あたたかくて、楽しい。
だから、ここにいることにした。
慣れない人の顔は、よくうさぎに変えて生きている。

人間になれなかつた私は、うさぎになつて、ひよこを作つてゐる。
みんな私だから、ここにいることを否定されない。

チャーシューメンをかきこんで、窯場に戻ると、ひよこたちはもう世界に馴染んでいた。人間の頭は我慢できなくて、途中で変えてきてしまった。

今日はいいお知らせがあるよ。なんと、新しいおうちを買ってきました！

「あたらしいおうちなの？」

「すなはいってないの？」

そうです！綺麗なおうちです！

ひよこたちをおうちに寝かせてしまえば、持ち運びは楽になるのだけれど、いつときだけでも姿が見えなくなってしまうのは寂しかつた。

もうちょっと外にいようか。綺麗だからね。

そうしてひよこたちは私の世界になつてくれる。

泣きそうなほど、健気に、純粹に。

陶酔する

二度と戻れない

それでいい

痺れるような

大海へ

小さな体をばたつかせて

大きく息をする

「いつか醒める？」

「今だけ酔えていられたら」

それでいい

それだけでいい



長月の夕焼け・出発前

侑木燈

静かな夕焼けに
静かな風は訪れる
ただ、歩いていった先に
ただ、やってみた先に
清明か、生命か、
風を感じている
これはきっと
ヒトの風ではなく
然の風であろう

遠い時の稔を
思い出す

長月の夕焼け
侑木燈

いくら準備しても忘れ物は出る
勢いのまま人々出発するからだ

出発後に必要なのは
忘れ物に気づくことではなく
新たな感覚に気づくことである
その忘れ物は旧来の遺物になる

新しい世界を創り続けるとは
そういうことだ

出発前
侑木燈



てつがく茶会

哲学対話と出会ってから

komu

僕が onecafe の代表になってから 1 年が経った。onecafe という大きなコミュニティの中で、僕の夢というか、目指したい場所をみなさんへ伝える機会はなかったように思う。ここでは、そんな想いとそこに至る経緯を書こうと思う。ちょっととした振り返りだ。

まずは僕が哲学対話に出会った頃の話だ。高校生の頃、新潟の片田舎に住んでいた僕に広い世界を少しだけ見せてくれたのが哲学対話の場だった。自分で言うのは少し恥ずかしいが、いわゆる多感な時期だ。多くの勘違いを抱えたまま、世界は自分の夢に光を与え、自分の絶望に同情してくれるものだと思っていた。

学校での生活は最悪で、僕とは少し価値観が合わない高校の友人、というか知人。学問の楽しさではなく受験にかかるための勉めを強いる先生たち。そんな学校という場所に辟易していた僕の楽しみは、個性が強すぎるメンバーが集まった生徒会、たまにある教科外の講演や探求学習、そして部活をサボって弾くピアノくらいだった。この頃から考えることは好きで、つまらない授業になんの意味があるのかだとか、高校生の薄っぺらい愛だの恋だの話だとか、そんなことに無駄に頭を捻っていた。尖っていたんだと思う。授業をほったらかして通い詰めた保健室では、養護教諭に「あたまで考え過ぎ」とよく言われていた。

そんな退屈な学校生活の中、目に入ったのが新潟大学で行われる哲学対話のイベントだった。扱うテーマは「愛」と「普通」。考えることが好きだった僕は即参加を決めた。参加してからは楽しかった。確か僕は、その頃一丁前に「全人類を愛している。」とか言っていた気がする。今ではだいぶ考えが変わってしまったが。そんな戯言すら否定せず、むしろどうしてそう考えたのかを聴いてくれる。そんな暖かい

雰囲気で普段関わらない人と関わり、対話し、たくさんの気付きを持ち帰れた高校2年の夏は最高だった。そして同年冬、振り返りのため、その時対話したみんなと再会することができた。あの時間は対話ではなく、お互いをもっと知るための会話があったと思う。そこで多くの人と仲良くなれた。新潟という地域が好きになったのは、あのイベントがあったことが何より大きいと思う。

そんなわけで、僕は哲学対話が大好きになってしまった。それから対話の場を探し回って、行き着いたのが onecafe だった。その頃 onecafe はコロナのせいでオンライン開催が主になっていた時期だった。僕も何度か参加した。自由で、なんか暖かい感じが大好きだった。2021年、僕は大学に進学し、onecafe 運営の条件である学部生になれた。それを機に運営に参加させてもらった。

運営に参加して1年目は、楽しさと難しさが混在する経験をした。好きな対話の場を作ることは楽しい。でも、当然ながら参加する人はその時々で変わるし、オンラインでのファシリテーションは対面とは違う難しさがあった。顔を出せない環境の人は、表情がわからないから話を振つていいものか、そういうこともよくわからない。それに加えてミュートする人は、そもそも参加しているのかわからない。人のリアクションはすごく大事なんだな、と実感した。そして毎回のテーマ案とリード文執筆、これもなかなか出ない時もあった。今まで参加者として楽しく対話できていたのは、こうした運営の仕事あってのことなんだと気づけた。

そして時は過ぎ、僕が 2022 年から代表をやらせていただくことになった。ずっと燻っていた想いがあった。高校時代に感じたあの楽し

さ、繋がりと気付きが生まれる場所を創りたい。そんな強い想いだった。

代表になってから、漠然とこのコミュニティを楽しくするのだと息巻いていた。運営に参加してくださっている人との1on1を重ね、自分の想いを伝えていった。そこで賛同し、活動を盛り上げてくれる仲間もできた。初めは一人でやりきるつもりだったが、一人で抱え込みすぎるなと叱咤してくれる人もいた。そこで自分の意識が変わった。もっと楽しくするためにには、自分一人だけじゃ無理だ。

そこから積み上げていった実績は、振り返ってみると目を見張るものがあったと思う。まず、対面回をついに実施することができた。過去の歴史を遡って、場所を決めて、やり方もオンラインの時とは変えて、ものすごく準備をして臨んだ。結果は成功と言えるものだった。頂いた感想は、嬉しい言葉がたくさん並べられていた。

それから、哲学プラクティス連絡会に出席した。これもかなりの準備をして臨んだ。大きな成果は、onecafeの先輩にコロナ前の状況や活動を聞けたこと、そして理念の大切さを教えていただけただことだ。これはたぶん、今まで継承されてきた onecafe の根幹なのだと思う。「他者との対話を通して、自分の価値観に気付く場を提供する。」

文言は変わらなくとも、きっとその代によって解釈は少しずつかわっていたのだと思う。一番大きな成果は、この理念を現運営の仲間と知恵を絞って、夢想して、解釈して、僕たちなりの納得できるゴールに至れたことだ。それから、哲学プラクティス連絡会はこの「理念の解釈」ともうひとつ、「学生が哲学カフェを開催する意義」について発表した。ここもこだわりたいポイントだった。本冊子にも「学生による哲学対話の実践」という部分にそのまとめが載っているので、読んでみてほしい。

これらの作業は本当に大変だった。プレゼン資料や発表原稿は、まさかの当日になってようやく及第点のものができたほどだった。準備段階ではだいぶ他の運営メンバーに頼らせてもらった。時には面倒な仕事を分担して作業したり、疲れる中でも作業したりで、ちょっとギスることもあったけど、「暖かい実務なんてないですよ。」そんな一言で心が軽くなった。そんなわけで、これを乗り越えて運営メンバーとはまた少し仲良くなれた。一歩一步、自分の掲げた理想に近付いていく気がした。

時には僕のアイディアにはないことを運営メンバーが提案してくれることもあった。哲学プラクティスの後、関西で行った「てつがく茶会」カフェというにはあまりに和心溢れる茶室で哲学カフェを開催した。すごく楽しかった。

この冊子も、運営3人のこだわりと、強めの個性が隠れている。本当に良い仲間に恵まれたと思う。今年度の運営の集大成として出せるものだと思う。特にこの冊子に関しては僕以外の二人が引っ張ってくれたものだ。いやほんとまじで。僕は執筆程度しかしていない。お二人に最大の感謝を。

さて、こんな素晴らしい仲間に恵まれながらも、自身は代表になってから活動にコミットできる時間が減ってしまった。一人暮らしの生活は結構お金がかかるので、週3で塾講師のアルバイトを始めた。それから、愛着のある新潟で高校生マイプロジェクトアワードの支援ファシリテーターとしても参加している。やらなきゃいけないことと、やりたいことと。それだけでキャパを超えてしまっていたのだ。本当に申し訳ない限りである。

振り返れば、僕は最初から高校生のときに参加した「高校生向けの

「哲学対話」が好きなのであって、「哲学的な哲学対話」は苦手だったのだと思う。つまりそれは、オンラインの形で、リード文がしっかりとしている onecafe のスタイルより自由な発想ができる哲学対話を好むということだろう。だからきっと、僕は毎回のテーマはふわふわしたものになっている。「エモい」だとか「可愛い」だとか、そんな感情を切り取ったものを考えるのが好きなのだ。これらはやはり若年層向けで、このテーマに社会人の方が入ってこられると、少し自分の「最高に楽しいと思える対話」から少し離れることがあった。と思う。確信を持って言えるわけではないが、そんなことがあったように思う。もちろんこれは社会人の方に参加してほしくないわけではない。事実、対面でやったときはなぜか自分の「最高に楽しいと思える対話」になっていたのだ。今となっては社会人の参加率で変わるものではないと思う。そのことに気付かない今まで、多分夏～秋くらいまでは低年齢層へのアプローチばかり気についていたと思う。今は社会人も学生も、関係なく楽しめる場を作れるように、ファシリテーション能力を鍛えている。

そして今後、僕は今まで通り「もっと楽しいコミュニティ」を目指す。それはコンテンツも含め、哲学対話という手段で何か楽しめる場を作っていく。やりたいことも、やらなきゃいけないこともたくさんある。でも、頂いたあと 1 年程度の間でどうにかもっと楽しめるよう、今年度は去年度よりも活動を加速していきたい。

願いは、誰にとっても面白い哲学対話コンテンツを作ること。そして onecafe という歴史あるコミュニティをもっと居心地よくなるように、運営していきたいと思う。

理解できないものがあるという幸せ

R.N

理解できないものがあることは幸せだと思う。

「クリエイティビティが求められる現代を生き残るために、自分の個性を発揮する必要がある」。近ごろ、こんな意見を耳にする機会が増えた。だが誰もが受け入れられる社会が到来したというのなら、今も生きづらさを感じる人がいるのはなぜだろう。個性を解放（？）できていないからだろうか。それとも、そもそも個性がないのか。

私は大学で哲学対話の主催をはじめた頃、多様な人に参加してもらうにはどうすればよいか、尊敬している先生に助言を求めたことがある。すると「身近な多様性を蔑ろにしていませんか」と、問われた。恥ずかしながら、盲点だった。

多様性というと、年齢やジェンダーなどカテゴライズされたものに飛びつきくなる。しかし、人をジャンルやカテゴリで判断することは、多様性の最たる否定ではないか。たとえ同じワードでも、そこに込める想いやニュアンスは十人十色である。その言葉は、言語化できない想いを、それでもなんとか伝えようと紡いだものかもしれない。

対話が終わると、私はいつも真に他者の意見を傾聴できていたか不安になる。私が安易に同調した彼らの言葉。その背景にあるものを、私は知らない。対話のはじめにあった、「人の意見に対して否定的な態度をとらない」という注意喚起が、頭の中をぐるぐる反芻する。意見への同意は、必ずしも篤実な反応ではない。

よい対話にできたと思えるファシリテーションは、共感や同意を重

ねる対話よりも、相違点を探しながら考えを客体化していく対話だった。

哲学対話は、相手を唯一無二のその人として、理解しようとする難しさと大切さを教えてくれる。マイノリティ・マジョリティなどという乱暴で機械的な括りのない、圧倒的に解像度の高いコミュニケーションが対話だと思う。そこに没個性はなく、あるのは無限の違いと、そこから生まれる発見の喜びだ。

誰もが理解し合い、受け入れられる社会が理想だとは思わない。生きづらさがあるからこそ、創造や驚きがある。理解し合えないことによる悲しみはたくさんある。だが、理解できないからこそ存在する、余白の可能性に目を向けてほしい。



喫茶あおい



アート哲学対話型鑑賞とはなに？

アート対話型鑑賞とは

1980年代の中頃、ニューヨーク発祥の鑑賞方法で1枚の絵画をみて対話する方法です。VTS (Visual Thinking Strategy) といいます。

この鑑賞方法は作者名も作品のタイトルも公表しないで自由に自分の思いを話し合います。絵画の専門的知識も必要ありません。どうしてそう思った？ 絵のどこからそう思った。

疑問と根拠で進めます。そうすると他者との対話を通して自分の視野も広がり気づきが生まれます。また、人前で話すのが苦手な人も「絵」を通して見て、考え、聴き、他者に言語化して言葉にすることでコミュニケーションが円滑にできるようになります。

絵は自分の投影でもあり対話することによって自己肯定感が育まれ、不確実性の時代を生き抜く力や感性やまた美意識も高まります。

アート哲学対話とは

絵画の対話鑑賞、そのつづきは1枚のアートから問い合わせ立て「哲学対話」の時間です。

アートをしながらお話する事により自分の内観やナラティブの物語が話し易く、他者の話もしも聞き易く共感性や思考力が高まります。

さあ。ご一緒に体験してみましょう。

美はしきもの見し人は、
はや死の手にぞわたされつ、
世のいそしみにかなはねば。
されど死を見てふるふべし
美はしきもの見し人は。

詩人フォン・プラーテン
堀田善衛「誰も不思議に思わない」より

作者や作品名など情報無しで、感じたこと
考えたことをお話ししましょう。



「さあさあ、見てらっしゃい、寄ってらっしゃい、そこの若いお兄さん、せっかくだからほら～近くに寄つといで」そんな口上が聞こえてきそう。

画面の登場人物をよくみてみよう。右端の大きな羽の帽子に豪華な金銀の刺繍入りの服は身なりの良い、どこかのお坊ちゃまであるか。顔もとからして疑いを知らない世間知らずだが、怪しげな場所に興味を持つ年頃でもある。

さてさて、母親のような妖艶な胸元にひかれて誘惑され、このギャンブル場に迷いこんだのであろうか。そして筋書き通り給仕の女性が赤ワインを注ぎ「あら、お兄さんそのテーブルの金貨は勝ったのね。凄い。トランプにお強いのね。景気つけに一杯どうぞ」などと会話が聞こえる。悪党らしき画面左の男が背後にダイヤのエースを隠し、勝負の時を待っているかのようだ。

「その時」はやはり姉御が目力で合図するのだろうか、緊張の場面が描かれている。コトが動いているのにお坊ちゃまは自分の次の切り札ばかり考え周りが見えていない。空気や気配も感じていない様子である。

少年は、この世に不正な行為があるなどとは予想も出来ないのでしょう。「やばいよ、やばいよ、顔を上げて三人の眼みてごらん」って言いたくなる。最初は甘い蜜を吸わせ最終的には身ぐるみ剥ぐ・・・。これがいかさま師の手口です。

しかし物語はどう展開するのか謎です。

種明かしから問い合わせを立て哲学対話



題名	『いかさま師』
作者	ラ・トゥール
制作年	1635年頃
種類	油彩
寸法	106×146 cm
所蔵	ルーヴル美術館

どう考えるか色々あって面白い・・・・ 脱予定調和

案外だまされたふりして逆手にとって、相手をだましているのかも知れないよ。「だまされたふり」で逆にだまされる巧妙化していく、一番の悪巧みは給仕の女性かな、お坊ちゃまと手を組んでいて妖艶な姉御を身ぐるみ頂き・・・・かも知れない。

いやいや、お坊ちゃま風の変装で悪質行為取り締まりの若い警察官だったり・・・・と。

だますよりだまされる方が良いとは、どういう意味？心の問題？だまして巻き上げたお金って後味が悪いよね。だます方とだまされる方ではどっとが悪い？「だますよりだまされろ」ということわざがあるよね。

さあ。今日の問い合わせは？

「大人の遊び」「だますとは」「私の認識」「あやしい気配とは」など皆さんで選んで深堀り哲学対話の時間を楽しみましょう。

作者や作品名など情報無しで、感じたこと
考えたことをお話ししましょう。



木立の茂みの中で揺れる、ぶらんこに揺れている乙女はだあれ？よくよく見ると可愛い顔も細い腕も投げ出している。細い足も真っ白でこれはこれはどうしたことか？つまり日の光に当たっていないのであろう。ということはお城のお姫様なのか疑問がわく。

もっと興味津々で観察眼を開花させてみよう。モード雑誌にでてくるようなお洒落のピンクの帽子、同じくコーディネートされたピンクのフリルスカート、首には粹なりボンを巻いて、袖には豪華なレースがなびいている。揺れるぶらんこからはミュールが空に舞い上がっている。さも愉しげでご満悦の様子が伺える。

いやはや画中の左下に揺れる揺れるぶらんこの彼女の足をのぞき込んでいる男性がいる。胸には薔薇の花を挿しているよう。「さあ、私の元においでよ」と言っているのか、それともスカートの中に興味があるのか？若い男女が愛し合っているのだろう…… どうぞご勝手に戯れてと言いたくなるが、画中右下の茂みにいる初老の人物を発見。ぶらんこをこいでいるではないか。初老の人物はだれ？侍従？ それとも夫？もし夫であればどういう事？

妻の浮気を容認しているの？画中に描かれているエンゼルって恋結びのキューピット？このキューピット口に手を当て「シー。今いいところだから内緒だよ」のしくさである。

ますます私の心も揺れる。どうなってんのって。

さてさて、あなたならこの名画をどう感じてどうみる？

種明かしから問い合わせを立て哲学対話

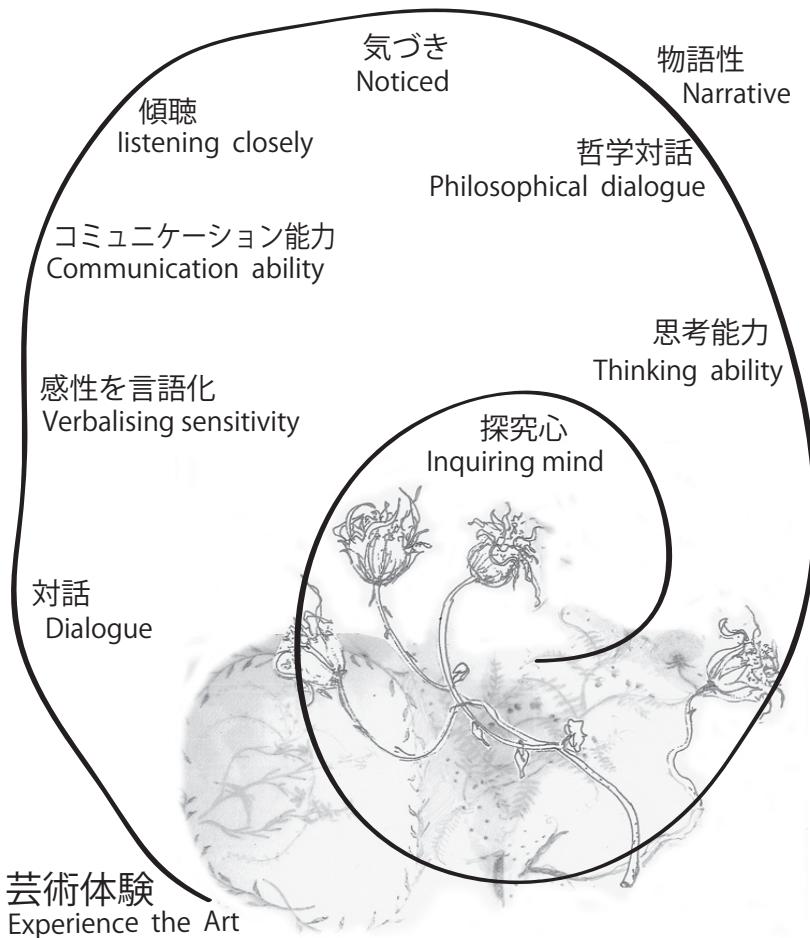


題名	『ぶらんこ』
作者	ジャン・オノレ・フラゴナール
制作年	1767年
種類	油彩・キャンヴァス
寸法	81×64.2 cm
所蔵	ザ・ウォーレス・コレクション

今日このごろ

物事を決める時いつも私は右か左か、いや真ん中か日々選択で、後悔しない日はないように思う。でも少なくとも後悔しないコツはそれって自分で選んだ?人にいわれたから?いや自分で選んだ。それだけなんだと思う。どの道を選んだとしても後悔したり傷つくことはあるよね。傷つかない選択ってないと思う。

だからきっと、どの道を選んでも責めない自分で生きていきたいなあ。





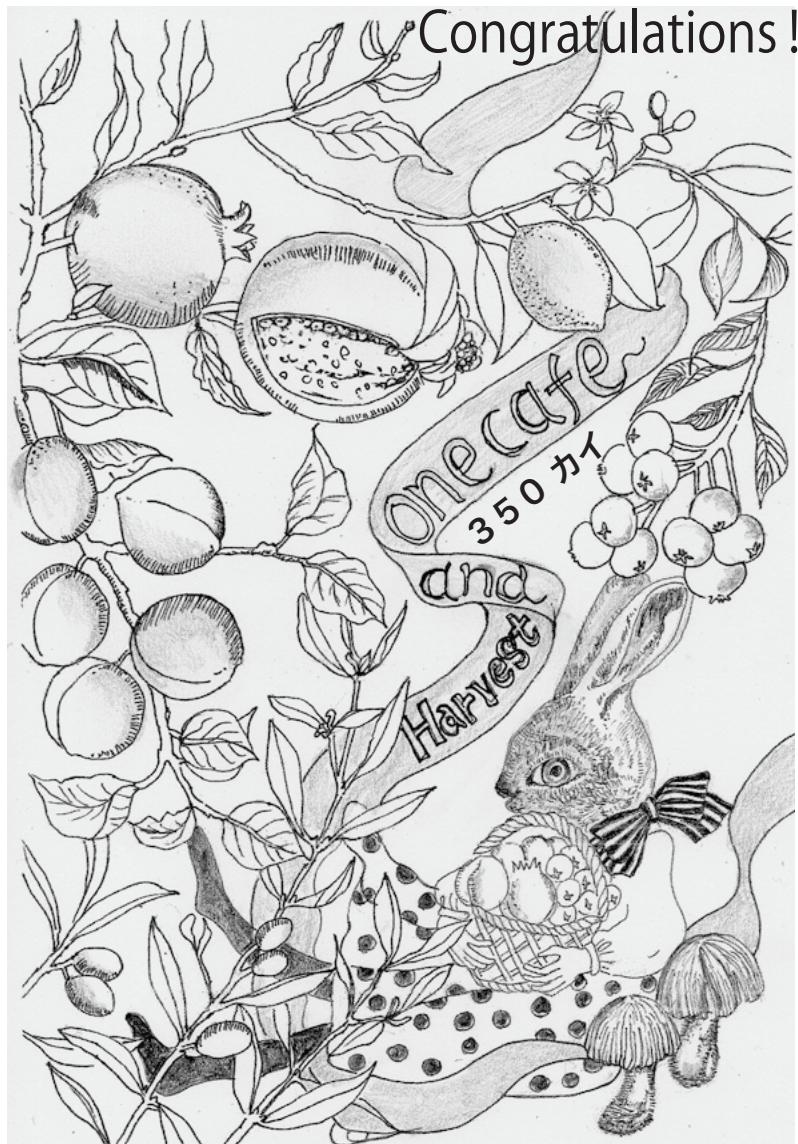
onecafe第350回

本質を見よう

今宵もお待ちしております

大塚益美

onecafe第350回
本質を見よう
今宵もお待ちしております







OBOG 会 『Fan Light』 結成

唯

この度は、通算開催回数 350 回を迎えたこと、誠におめでとうございます。

2015 年 5 月 23 日に新宿で開催された第 1 回から 7 年半の間、実際に月 4 回ペースを維持していたことになります。途方もない偉業に違いありません。

現運営・歴代運営の尽力、並びに膨大な数に上っている参加者皆様のご協力あってこそその記録です。onecafe に関わった全ての方との喜びを分かち合いたいと感じております。

この記念誌の発行にあたり、onecafe の過去を知る者として現運営とやりとりする中で、不意に投げかけられた質問が「web サイトに書いてあったような OBOG 会は本当に存在するのか」というものでした。OBOG 会は、onecafe 結成時から構想されていたものの今に至るまで形になっていなかった活動です。

onecafe が歴史を重ねて OBOG 参加者が増えた今なら、現運営が歴代に類を見ないほどの活力を持っている今なら、全世界が苦難に直面し対話の必要性が高まっている今なら、OBOG 会の結成を現実に出来るのではないかと考えています。

以下、クラシックメンバーへのヒアリング・現運営との協議を踏ました、暫定的な OBOG 会の構想になります。

2023 年 5 月結成を目標に調整を行なっていくので、正式に募集をかけた際にはぜひご参加ください。

ご意見等ある方からの連絡も隨時お待ちしております。

◆募集条件

複数回参加経験のある学生以外の方。
(onecafe との関わり方として、学生には運営、学生以外には OBOG 会への参加を推奨して住み分けを行いたいため)

◆年会費

3000 円/年。

集金方法は、出来るだけシンプルかつ、匿名性を確保した形で行えるよう配慮します。現運営との顔合わせの場にて直接渡す方法をメインに、他補助的に選択できる方法を検討中です。

◆予算用途

onecafe の活動理念『他者との対話を通して自分の価値観に気づく場を提供する』に準ずる用途の中で現運営に決定してもらいます。OBOG 会は onecafe の発展に寄付の精神で出資し、使用用途への干渉はしません。

◆会員特典

- ・会員番号・メンバーズカード発行
- ・現運営+OBOG 会の連絡ツール招待
- ・現役活動報告観覧権
- ・現運営+OBOG 会の集会参加権

◆質疑応答 現役→OBOG

Q1. 活動報告としての議事録はどのレベルのクオリティが求められるのか。

→ LINE でいえば、続きを読むを押さなくて済む程度。メインのテーマに対して、みんなが細分化して考えて行った問い合わせの流れを追えればいい。匿名性の確保の面でも、各個人の意見の詳細まではいらない。

Q2. 活動報告として会の録音をアップロードをしたとして、そんなに聞いてもらえるのか。

→再生数がどうというより、アクセスできる状態にあることが大切。副産物的ではあるが、onecafe 活動のアーカイブも OBOG 会の機能として期待できるところ。OBOG 会のリターンとして考えるなら、公開先は OBOG 会のみだから、全世界に公開するよりは参加者の同意も得られると思う。

Q3. OBOG 会が現役に求めるイベントは何か。

→クラシックメンバーに個別に意見を聞いてみると、現運営と直接会う場を求めてる。onecafe 自体、OBOG だからといって参加できない活動ではないが、学生主体の場に顔を出すことにハードルを感じている人が多いようだ。現実的に考えて、年 2 回程度か。

Q4. 概要から株主総会に近い印象を受けていて、承認を得られないと活動できないのか。

→全くそんなことはない。基本的にOBOG会からの金銭的補助は寄付のイメージで使用用途に干渉はしない。リターンとして設定する項目も、OBOG会のためにではなく、onecafeとしてやっておくべきことに留めたい。

Q5. 一律3000円に意図や内訳はあるのか。

→何に使うのかが決まっていない現状ではもちろん内訳はない。ただ寄付の精神として参加を募る際に、3000円は出せないけど1000円は出せるという人を考慮する意義がない。寄付なら3000円が最低ライン。

Q6. お金がかかるプロダクトごとにクラウドファンディングのようにお金を集めるのではなく、年ごとに年会費を集めてやることの意義は何か。

→onecafeに帰属意識がある人に向けた活動として具体的な形があるものとして作りたい。ここ数年のonecafe運営が年度制を採用している点でも年会費での集金は相乗効果があると思う。

◆質疑応答 OBOG→現役

Q1. 運営だから払っているものはあるか。

→交通費以外にはない。Zoom は大学のライセンスで無料で使えて
いる。ただそれはコロナ禍かつ限られた大学の学生のみで、運営の
代によっては今後自己負担する形になる可能性がある。

Q2. 現在の参加者が負担しているが金額はどの程度か。

→現在はオンライン形式でやる場合にカフェではなく貸し会議室
を使っている。使用料を人数で割るので、直近の会でいうと一人
350 円程度。OBOG 会に負担してもらうほどの額でもないと思う。

Q3. 議事録の作成にどれくらい時間がかかるか。

→オンライン中も PC で議事録を撮っていて、それをただ PDF にし
たものだから、全くと言っていいほど別途の時間はかかるていな
い。

Q4. お金があればやりたいことはあるか。

→中学生・高校生への対話ワークショップ開催、記念冊子の印刷費。
コンテンツを広げること、面白さを形にしていくことに使いたい。

Q5. OBOG 会にしてほしいことは何かあるか。

→自分たちの代はうまく引き継がれてこなかった。経験者・参加者としての目線から、意見だったり、今までどうやっていたのかだったり、気軽に聞ける方がいればありがたい。オンライン全盛の時期になってから、東京在住の運営が少なくなっている。オンライン開催時に、ファシリテーターを頼めたら嬉しい。



名曲・珈琲 新宿らんぶる

第 8 回哲学プラクティス連絡会

2022 年 11 月 12 日

オンライン開催

第8回 哲学プラクティス連絡会

(上記)

14:15～15:15
Zoomによる
オンライン
発表RoomID

学生による 哲学対話の 実践

何者であるかを問わない哲学対話において、なぜ「学生が」哲学カフェを開いているのか。
学生哲学対話団体onecafeのこれまでとこれから試みを述べていく。

発表：小室 衆吉・神原 裕・高野 唯
(学生哲学対話団体onecafe)

陶芸作品/レイアウト：中津川 莉音

一般2000円
学生500円
高校生以下および事情のある方 無料
Peatix (<https://peatix.com/event/3380801/view>)

申し込み

「学生による哲学対話の実践」

発表：小室 衆吉・神原 裕・高野 唯

哲学対話サークルを運営する上で難しいと感じていること

大西真子,仲村莉音(大阪経済大学哲学カフェ)
神原裕,高野唯(学生哲学対話団体onecafe)

【発表者紹介】

【大阪経済大学哲学カフェ】

大阪経済大学届出の哲学対話サークル。

「考える場所」と「居心地の良い場所」の両立をモットーに、主に学内向けの哲学対話を開催。

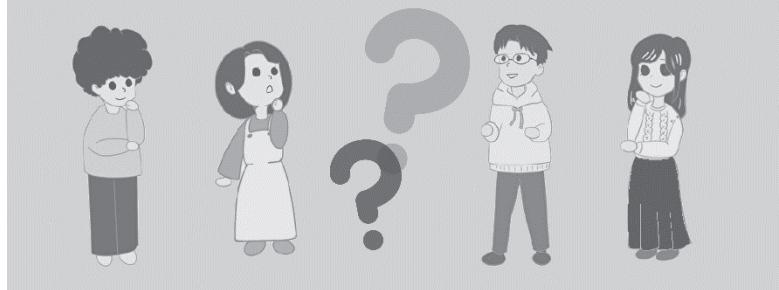
【学生哲学対話団体onecafe】

関東・関西の学生有志が運営している哲学対話団体。特定の大学を母体としておらず、全国各地からさまざまな人が参加している。2014年に活動を開始し、現在9年目を迎える。

【内容】

学生が哲学対話団体を運営する上で、課題となったことやその課題への取り組みを発表します。

- ・なぜ哲学対話サークルでなくてはいけないのか？
- ・今やっていることの難しさ
- ・課題の解決に向けて



「哲学対話サークルを運営する上で難しいと感じていること」

発表：大西 真子・仲村 莉音(大阪経済大学哲学カフェ)

神原 裕・高野 唯(onecafe)



新宿西口交番前

開催テーマ一覧

(第1回～第350回)

開催回	日付	テーマ
第 1 回	2015/05/23	友人として魅力的な人とは
第 2 回	2015/05/30	S N S のコミュニケーションを考える
第 3 回	2015/06/03	休日のより良い過ごし方
第 4 回	2015/06/06	ひとりで行動できる範囲とは
第 5 回	2015/06/13	人の気持ちをどこまで考えるか
第 6 回	2015/06/20	一番大切なものは
第 7 回	2015/06/24	本当のリア充になるための条件
第 8 回	2015/06/27	受けたかった教育
第 9 回	2015/07/04	食事に求めるもの
第 10 回	2015/07/08	良い休日の過ごし方
第 11 回	2015/07/11	素敵な断り方
第 12 回	2015/07/18	ムダの必要性
第 13 回	2015/07/22	自分の好きなところ
第 14 回	2015/07/25	笑いとは
第 15 回	2015/08/01	魅力的な恋人とは
第 16 回	2015/08/15	頭のいい人とは
第 17 回	2015/08/19	直感の信頼度
第 18 回	2015/08/22	同性に感じる魅力
第 19 回	2015/08/29	どこから特技
第 20 回	2015/09/05	アドラー心理学に迫る！
第 21 回	2015/09/09	ファッショニに現れる個性
第 22 回	2015/09/12	無くてよいもの
第 23 回	2015/09/19	一人で考える時間
第 24 回	2015/09/23	他人の不幸が嬉しいわけ
第 25 回	2015/09/26	居心地のいい場所

第 26 回	2015/10/03	愛を感じるとき
第 27 回	2015/10/07	メンヘラ
第 28 回	2015/10/10	助けの求め方
第 29 回	2015/10/17	愛するということ
第 30 回	2015/10/21	なぜ価値観の違う人と関わるか
第 31 回	2015/10/24	なぜ義理を果たすのか
第 32 回	2015/10/31	死の意味とは
第 33 回	2015/11/07	どこから屁理屈か
第 34 回	2015/11/11	メンヘラ
第 35 回	2015/11/14	フィクションの捉え方
第 36 回	2015/11/21	キャラ付け
第 37 回	2015/11/25	はじめてのデート
第 38 回	2015/11/28	心と言葉の乖離
第 39 回	2015/12/05	ルーティンワーク
第 40 回	2015/12/09	寂しさ
第 41 回	2015/12/12	二分法への懷疑
第 42 回	2015/12/19	今！
第 43 回	2015/12/23	お酒とのつきあい方
第 44 回	2016/01/06	優しさ
第 45 回	2016/01/09	楽しい話
第 46 回	2016/01/16	あきらめのつけ方
第 47 回	2016/01/21	結婚で人は幸せになれるか
第 48 回	2016/01/24	知らないほうがいいこと
第 49 回	2016/01/31	「普通」の基準はどこにあるか
第 50 回	2016/02/04	道を歩くときに考えること

開催回	日付	テーマ
第 51 回	2016/02/07	大学で何を学ぶべきか
第 52 回	2016/02/14	占いのとらえかた
第 53 回	2016/02/18	平常心を失いそうになるとき
第 54 回	2016/02/21	教養とはなにか
第 55 回	2016/02/28	目的思考への懷疑
第 56 回	2016/03/03	孤独との付き合い方
第 57 回	2016/03/06	方法論と個性の共存
第 58 回	2016/03/17	平常心を失いそうになるとき
第 59 回	2016/03/19	美しさとは
第 60 回	2016/03/27	男女の思考の違い
第 61 回	2016/03/31	自己肯定感を感じるとき
第 62 回	2016/04/09	優先順位のつけ方
第 63 回	2016/04/13	感情的になるべきとき
第 64 回	2016/04/17	同情する範囲
第 65 回	2016/04/23	負けは必要か
第 66 回	2016/04/28	充足感の得られること
第 67 回	2016/04/30	親切とお節介の狭間
第 68 回	2016/05/08	帰属意識の芽生え
第 69 回	2016/05/14	教育とマインドコントロールの違い
第 70 回	2016/05/18	忘却の効能
第 71 回	2016/05/22	流行りは良いのか
第 72 回	2016/05/28	ブックカフェ「ソクラテスの弁明」
第 73 回	2016/06/05	私のトリセツ
第 74 回	2016/06/11	自己幸福破壊衝動
第 75 回	2016/06/15	好きな異性のタイプはどう決まるか

第 76 回	2016/06/26	憧れる生き方
第 77 回	2016/07/02	勝利の快感
第 78 回	2016/07/07	かしこい嫌われ方
第 79 回	2016/07/13	乏しさということ
第 80 回	2016/07/17	ここ 1 年間での変化
第 81 回	2016/07/24	測れない良さ
第 82 回	2016/08/01	悪いと知っていてもやってしまうこと
第 83 回	2016/08/06	若いうちに何をするべきか
第 84 回	2016/08/10	心を許せる境界
第 85 回	2016/08/23	オリジナリティはあるのか
第 86 回	2016/08/31	ブックカフェ「これからの中義の話をしよう」
第 87 回	2016/09/09	刑罰といじめに線引きができるか
第 88 回	2016/09/13	色のイメージについて
第 89 回	2016/09/18	言葉の嘘
第 90 回	2016/09/28	VR は虚しいか
第 91 回	2016/10/02	知識は感性を深めるか？
第 92 回	2016/10/05	ごめんで済むなら警察はいらない
第 93 回	2016/10/16	私のアイデンティティ
第 94 回	2016/10/22	優しい嘘のつき方
第 95 回	2016/10/30	ブックカフェ「啓蒙とは何か」
第 96 回	2016/11/06	多様性の功罪
第 97 回	2016/11/10	どこまでが友人か
第 98 回	2016/11/13	芸術に、言葉
第 99 回	2016/11/20	矛盾をいかに受け入れるか
第 100 回	2016/12/03	I. 哲学へのイメージ II. 哲学に何を期待するか

開催回	日付	テーマ
第 101 回	2016/12/11	ヒロインの系譜
第 102 回	2016/12/18	なぜ生きる意味が必要なのか
第 103 回	2017/01/11	IoT に満ちた世界
第 104 回	2017/01/15	理想的人格とは
第 105 回	2017/01/20	暴力は美しいか
第 106 回	2017/02/05	なぜ結婚したがる？
第 107 回	2017/02/15	矛盾をいかに受け入れるか？
第 108 回	2017/02/19	悪について
第 109 回	2017/02/22	人体はどこまで拡張されるか
第 110 回	2017/02/27	何を考えて生活するか？
第 111 回	2017/03/06	ギブアンドテイクだけが人間関係か
第 112 回	2017/03/13	ワガママの届け方
第 113 回	2017/03/21	なぜ気づいてくれない
第 114 回	2017/03/26	自分に合った感情表現
第 115 回	2017/04/16	ガス抜きの仕方
第 116 回	2017/04/21	〈生活〉について
第 117 回	2017/04/27	どんな自分を希望するか
第 118 回	2017/04/30	レッテルとどう向き合えばよいのか
第 119 回	2017/05/11	どのように他人を区別するか
第 120 回	2017/05/14	価値基準はどこにあるか
第 121 回	2017/05/19	恋愛はどこまで許容するか
第 122 回	2017/05/23	思考はどれだけ有用か
第 123 回	2017/05/28	青春について
第 124 回	2017/06/06	生き辛さ
第 125 回	2017/06/09	フェミニズムの印象

第 126 回	2017/06/17	人と一緒にやる意味は何か
第 127 回	2017/06/21	普通は普通か
第 128 回	2017/06/25	死生観
第 129 回	2017/07/05	無題
第 130 回	2017/07/09	自分の言葉で語る意味とは
第 131 回	2017/07/14	シンプルな生活の効用とは？
第 132 回	2017/07/22	雰囲気の生成力
第 133 回	2017/07/29	他者からの承認
第 134 回	2017/08/02	あなたのファッショングループとは
第 135 回	2017/08/19	性格は精神を捉えられるか？
第 136 回	2017/09/04	無題
第 137 回	2017/09/09	敬語は必要か？
第 138 回	2017/09/15	中立である事は重要？
第 139 回	2017/09/19	友人と恋人の境界線はどこに引かれるか？
第 140 回	2017/09/25	優しさとは何か？
第 141 回	2017/09/29	マイペースは何故だめか？
第 142 回	2017/10/06	距離感の縮め方
第 143 回	2017/10/08	経験の価値
第 144 回	2017/10/13	わたしが怖いもの
第 145 回	2017/10/15	名前の意味とは
第 146 回	2017/10/20	何を笑うか
第 147 回	2017/11/06	知らない人にも優しくするべきか
第 148 回	2017/11/10	習慣で見えなくなること
第 149 回	2017/11/14	我慢の必要性
第 150 回	2017/11/21	シュールさとは何か

開催回	日付	テーマ
第 151 回	2017/11/26	かっこいいモテ方
第 152 回	2017/12/03	劣等感との向き合い方
第 153 回	2017/12/08	コミュ障と過ごしす楽しさとは
第 154 回	2017/12/20	選択肢が多いことは不幸か
第 155 回	2017/12/22	ありのままに見るとは
第 156 回	2018/01/03	大人とは何か
第 157 回	2018/01/10	コミュニティの移動について
第 158 回	2018/01/16	褒め言葉が歪んで聞こえるワケ
第 159 回	2018/01/26	バカと幸福度の関係性
第 160 回	2018/01/31	どうせ死ぬのになんて生きてるの？
第 161 回	2018/02/06	許されるとは何か
第 162 回	2018/02/09	利便性と引き換えに失ったモノ
第 163 回	2018/02/15	嬉しいプレゼントの条件
第 164 回	2018/02/22	無題
第 165 回	2018/02/25	ブックカフェ「顔の美醜について」
第 166 回	2018/02/27	上手い自慢話の仕方
第 167 回	2018/03/10	こだわりの持ち方
第 168 回	2018/03/13	タメ語ってめんどくね？
第 169 回	2018/03/23	合法なら何をしてもいいのか？
第 170 回	2018/03/26	ブランド物を買う理由
第 171 回	2018/03/30	性的な話はなぜタブーなのか？
第 172 回	2018/04/04	心がキレイとは何か
第 173 回	2018/04/08	無題
第 174 回	2018/04/11	客観視は可能か
第 175 回	2018/04/18	ブックカフェ「無知はどこまで許されるのか」

第 176 回	2018/04/20	結婚を前提としないカップルの意味
第 177 回	2018/04/26	ブックカフェ『友達』(安部公房著)
第 178 回	2018/05/09	メンタルの強さとは
第 179 回	2018/05/11	お酒を飲む必要性
第 180 回	2018/05/20	目に見えないものを信じる理由
第 181 回	2018/05/25	シネマカフェ『ザ・スクエア 思いやりの聖域』
第 182 回	2018/05/30	付き合うとは何か
第 183 回	2018/06/08	憂鬱な夜の過ごし方
第 184 回	2018/06/15	一人ではできること
第 185 回	2018/06/27	シネマカフェ『ファントム・スレッド』
第 186 回	2018/07/11	会話や議論が成立する条件
第 187 回	2018/07/18	映画について
第 188 回	2018/07/27	ブックカフェ『ノルウェイの森』
第 189 回	2018/08/07	変えられるものと変えられないものの違い
第 190 回	2018/08/20	無題
第 191 回	2018/08/28	どの本当が一番「本当」か
第 192 回	2018/09/13	言葉で表せないもの、伝えられないもの
第 193 回	2018/09/20	依存の苦しみ
第 194 回	2018/09/29	なぜ夕陽を美しいと思うのか
第 195 回	2018/10/17	どんな表情をしながら歩けばいいのか
第 196 回	2018/10/21	時間が解決してくれるものは何か
第 197 回	2018/10/29	無題
第 198 回	2018/11/19	「他人に興味がある」とは何か?
第 199 回	2018/11/28	私たちは生まれてくるべきではなかったのか
第 200 回	2018/12/12	無題

開催回	日付	テーマ
第 201 回	2018/12/18	目的がない行動に今どのような意味があるのか？
第 202 回	2018/12/21	なぜ誕生日をお祝いするのか？
第 203 回	2018/12/27	「終わり良ければ全てよし」か？
第 204 回	2019/01/07	無題
第 205 回	2019/01/18	あなたにとって音楽とは？
第 206 回	2019/01/31	なぜ人は怒るのか？
第 207 回	2019/02/12	ネタバレは悪か？
第 208 回	2019/02/19	作品の感想と作者の人となりは関係するのか？
第 209 回	2019/02/22	ライブに行く目的とは
第 210 回	2019/03/06	センスの良さと悪さについて
第 211 回	2019/03/12	「Don't Think. Feel!」は何を示唆しているのか
第 212 回	2019/03/23	無題
第 213 回	2019/04/09	時代によって価値観が変わるのはなぜか？
第 214 回	2019/04/18	あなたにとって社会とはどのような存在か？
第 215 回	2019/04/25	髪の毛が象徴するものは何か？
第 216 回	2019/05/10	私たちは商品か？
第 217 回	2019/05/22	多様性はどこまで許されるか？
第 218 回	2019/05/28	責任のあり方とは？
第 219 回	2019/06/14	他人を理解することは可能か？
第 220 回	2019/06/28	自己犠牲の精神とは？
第 221 回	2019/07/05	感情をどうコントロールするか
第 222 回	2019/07/12	家族に対して抱く感情
第 223 回	2019/08/09	どんな服を着たいか
第 224 回	2018/08/12	多様性とは何か
第 225 回	2019/08/19	弱者はどう立ち回ればいいか

第 226 回	2019/09/04	芸術は必要か
第 227 回	2019/09/17	敬語を美しいと感じるか
第 228 回	2019/09/26	フィクションと現実は関係しているか
第 229 回	2019/10/09	コミュニケーションはどのように使い分けるか
第 230 回	2019/10/18	SNS の良さと悪さについて
第 231 回	2019/10/25	言葉の持つ力とは
第 232 回	2019/11/05	自己愛の正体
第 233 回	2019/11/16	愛は有限か
第 234 回	2019/12/03	人はなぜ歴史を学ぶのか
第 235 回	2019/12/06	若さはなぜ素晴らしいのか
第 236 回	2019/12/10	自己犠牲の精神とは
第 237 回	2019/12/15	哲学に期待すること
第 238 回	2019/12/29	生命が終わるとき
第 239 回	2020/01/21	「思い出」とは何か
第 240 回	2020/01/28	「時間」は誰のものか
第 241 回	2020/01/31	無題
第 242 回	2020/02/06	「伝統」とは何か
第 243 回	2020/02/16	依存の苦しみ
第 244 回	2020/02/28	人はなぜ「物語」を創るのか
第 245 回	2020/03/22	無題
第 246 回	2020/03/25	自分(人)の存在意義
第 247 回	2020/04/17	“私”はなぜ生まれてきたのか
第 248 回	2020/04/21	長生きは幸せか
第 249 回	2020/04/27	忘れることの意味
第 250 回	2020/05/03	「孤独」への恐怖

開催回	日付	テーマ
第 251 回	2020/05/12	私たちは「別人」になれるのか
第 252 回	2020/05/22	人はなぜ「正義」を目指すのか
第 253 回	2020/05/29	私たちに「自殺する権利」はあるか
第 254 回	2020/06/04	感動はどこから来て、私たちに何をもたらすのか
第 255 回	2020/06/12	“運がいい”ことは良いことか
第 256 回	2020/06/22	「好きになる」「嫌いになる」とはどういうことか
第 257 回	2020/06/26	教養があるとはどういうことか？
第 258 回	2020/07/05	嘘は必要か？
第 259 回	2020/07/10	優しさと甘さはどう違うのか？
第 260 回	2020/07/14	人は何のために生きるのか
第 261 回	2020/07/19	「常識的を疑え」の真意とは
第 262 回	2020/08/02	「方言」は何を意味するか
第 263 回	2020/08/14	愛情を抱く理由、それでもたらされるもの
第 264 回	2020/08/27	哲学を学校教育に取り入れるべきか
第 265 回	2020/09/10	人はなぜ恋愛をするのか
第 266 回	2020/09/17	誰かの死をどうやって乗り越えるか
第 267 回	2020/09/25	現実と仮想の区別はどこまでつけられるのか
第 268 回	2020/09/30	私たちはいつ大人になるのか？
第 269 回	2020/10/05	「コロナ」は何を変えたのか
第 270 回	2020/10/10	「孤独」とは如何なるものか
第 271 回	2020/10/16	怠惰はなぜ悪なのか？
第 272 回	2020/10/24	人が生きたいと思うとき
第 273 回	2020/11/08	私達は生まれてこない方がよかったのか？
第 274 回	2020/11/17	外見がもつ力とは
第 275 回	2020/11/21	表現の自由と葛藤

第 276 回	2020/11/28	無駄なものとそうでないものの違い
第 277 回	2020/12/08	私たちといつ、“性”を意識するか
第 278 回	2020/12/15	「悪」は誰が決めるのか
第 279 回	2021/01/04	「音楽」について
第 280 回	2021/01/16	尊敬の根底にあるものとは
第 281 回	2021/01/23	人はなぜ平等だと言われるのか
第 282 回	2021/01/31	生きにくさに関して
第 283 回	2021/02/07	ほんとうの「自分」とは
第 284 回	2021/02/22	老いることについて
第 285 回	2021/02/27	恋愛と道徳の関係とは
第 286 回	2021/03/10	幸せの感じ方
第 287 回	2021/03/17	諦めることの意義
第 288 回	2021/03/21	いつ“友人”になるのか？
第 289 回	2021/03/27	無題
第 290 回	2021/04/04	「責任」とは何か
第 291 回	2021/04/18	何が人生を有意味なものにするか
第 292 回	2021/04/25	なぜ恋愛に夢を見るのか
第 293 回	2021/05/16	価値は誰が決めるか
第 294 回	2021/05/18	可愛いとは何か
第 295 回	2021/05/23	私たちはなぜ自由であることを求めるのか
第 296 回	2021/05/26	何をもって「人間」とするか
第 297 回	2021/06/09	生きるために必要なものとは？
第 298 回	2021/06/16	倫理的に振る舞うことで私たちの人生は豊かなものになるか
第 299 回	2021/06/22	「普通」って何だろう
第 300 回	2021/07/18	「推し」の存在は生活を豊かにするか

開催回	日付	テーマ
第 301 回	2021/07/27	動物の権利について
第 302 回	2021/08/16	私たちはなぜ捨てられないのか
第 303 回	2021/08/21	「生まれつきの不平等」をどう考えるか
第 304 回	2021/08/22	過去、今、未来の自分は同じ人間？違う人間？
第 305 回	2021/09/08	美しさについて(学生回)
第 306 回	2021/09/16	多様であることはどこまで許されるか
第 307 回	2021/09/23	私たちはなぜ哲学対話をするのか
第 308 回	2021/09/28	「変わってる」の意味
第 309 回	2021/10/07	古典を読む意義とは何か？
第 310 回	2021/10/12	エンターテイメントについて(学生回)
第 311 回	2021/10/21	「善いこと」について考える
第 312 回	2021/10/26	理想社会とは何かの？
第 313 回	2021/11/11	「自分の幸せ」と「客観的な幸せ」
第 314 回	2021/11/18	大人とは何か(学生回)
第 315 回	2021/11/24	理想の根拠
第 316 回	2021/11/28	日常の幸せを考える
第 317 回	2021/12/07	対面で活動することの意義
第 318 回	2021/12/16	「幸せでない人」とはどんな人か？
第 319 回	2021/12/20	社会に溢れる「ラベリング」を考える
第 320 回	2021/12/27	あなたにとっての健康とは何か、どんなものか
第 321 回	2022/01/17	嫉妬
第 322 回	2022/01/29	詩の鑑賞
第 323 回	2022/02/09	愛とは何か
第 324 回	2022/02/17	共感することについて
第 325 回	2022/02/25	感情の貯蓄と消費

第 326 回	2022/03/05	人生の豊かさとはなんだろう
第 327 回	2022/03/10	概念の在り処
第 328 回	2022/03/23	私たちはなぜ哲学対話をするのか
第 329 回	2022/03/28	人は、自分のことを特別だと考えているのだろうか
第 330 回	2022/04/04	学ぶとはどうすることか
第 331 回	2022/04/13	身内ってなんだろう
第 332 回	2022/04/20	「ひとのため」とは何か
第 333 回	2022/05/09	「らしさ」ってなんだろう？
第 334 回	2022/05/14	不安はどのように生まれるのか
第 335 回	2022/05/23	大人としての意識とは何か
第 336 回	2022/05/28	信頼とは
第 337 回	2022/06/06	愛したいか、愛されたいか
第 338 回	2022/06/13	「間」の読み方
第 339 回	2022/06/20	豊かな人生とはどのようなものか
第 340 回	2022/07/18	自分勝手とは
第 341 回	2022/07/25	「普通」を「普通」であると思うのはなぜか
第 342 回	2022/08/11	無駄を考える
第 343 回	2022/08/16	どうすれば自分を愛せるのか
第 344 回	2022/08/22	「エモさ」について考える
第 345 回	2022/08/29	青春とは
第 346 回	2022/09/04	信じる力とは
第 347 回	2022/09/14	絶望しているとはどういう状態か
第 348 回	2022/09/20	惰性がもたらすもの
第 349 回	2022/09/26	どんな人を家族と見なすのか
第 350 回	2022/10/15	対話とは何か

dia-

発行日：2023年3月1日

発行：onecafe

編集：小室衆吉・神原裕・高野唯

表紙：中津川莉音

mail : onecafe.2015@gmail.com

HP : <https://onecafe.mystrikingly.com/>

Twitter : @onecafe_
